

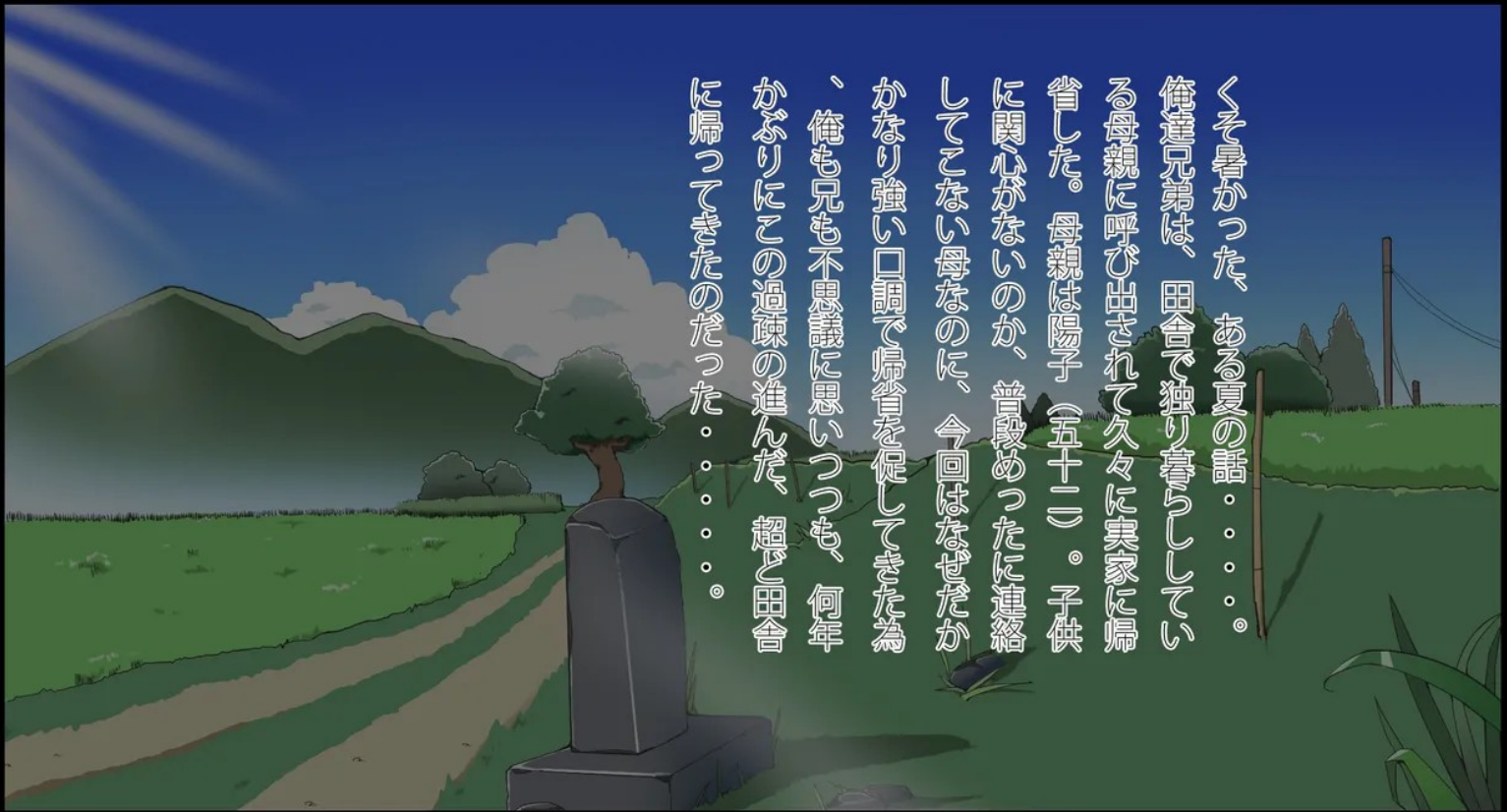


村のえっろい風習のおかげで
母とセクロスできました。

んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡
お仕事中心なの♡んっ♡んっ♡んっ♡

MADE BY MORROW



くそ暑かった、ある夏の話。。。。
俺達兄弟は、田舎で独り暮らししている母親に呼び出されて久々に実家に帰省した。母親は陽子（五十二）。子供に関心がないのか、普段めったに連絡してこない母なのに、今回はなぜだかかなり強い口調で帰省を促してきた為、俺も兄も不思議に思いつつも、何年かぶりにこの過疎の進んだ、超ど田舎に帰ってきたのだった。。。。

見捨てられたかのように大きな国道から切り離された谷あいの小さな村。

娯楽施設なんて一切ないから、当然若者達は俺達兄弟を含めてみんなこの村を出ていく。。。。。

「。。。。ただいまー。」

バス亭からの遠い道のりをひたすら歩きやつと奥家にたどり着くと、すでに兄貴は着いていて、暇そうにテレビを眺めていた。

「遅かったねー。荷物置いて、ちやつちやつとお昼たべちゃってー!。」

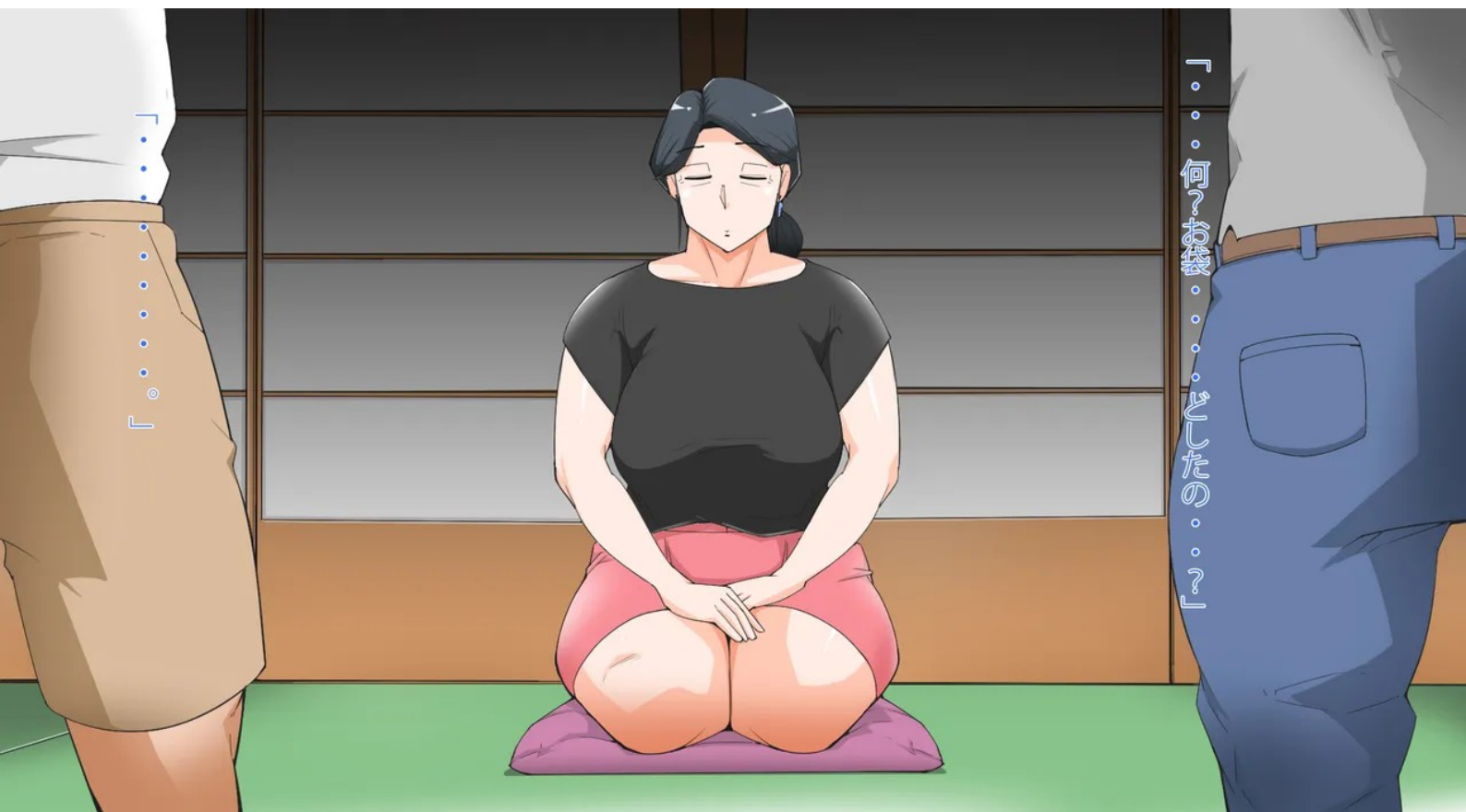
久しぶりの母の手料理をゆっくりと味わう間もなく、急かされるように胃袋に流しこみ終わると、

「。。。。それじゃ二人とも、話があるから。。。。寝室にきなさい。」

話があるのに。。。寝室？。

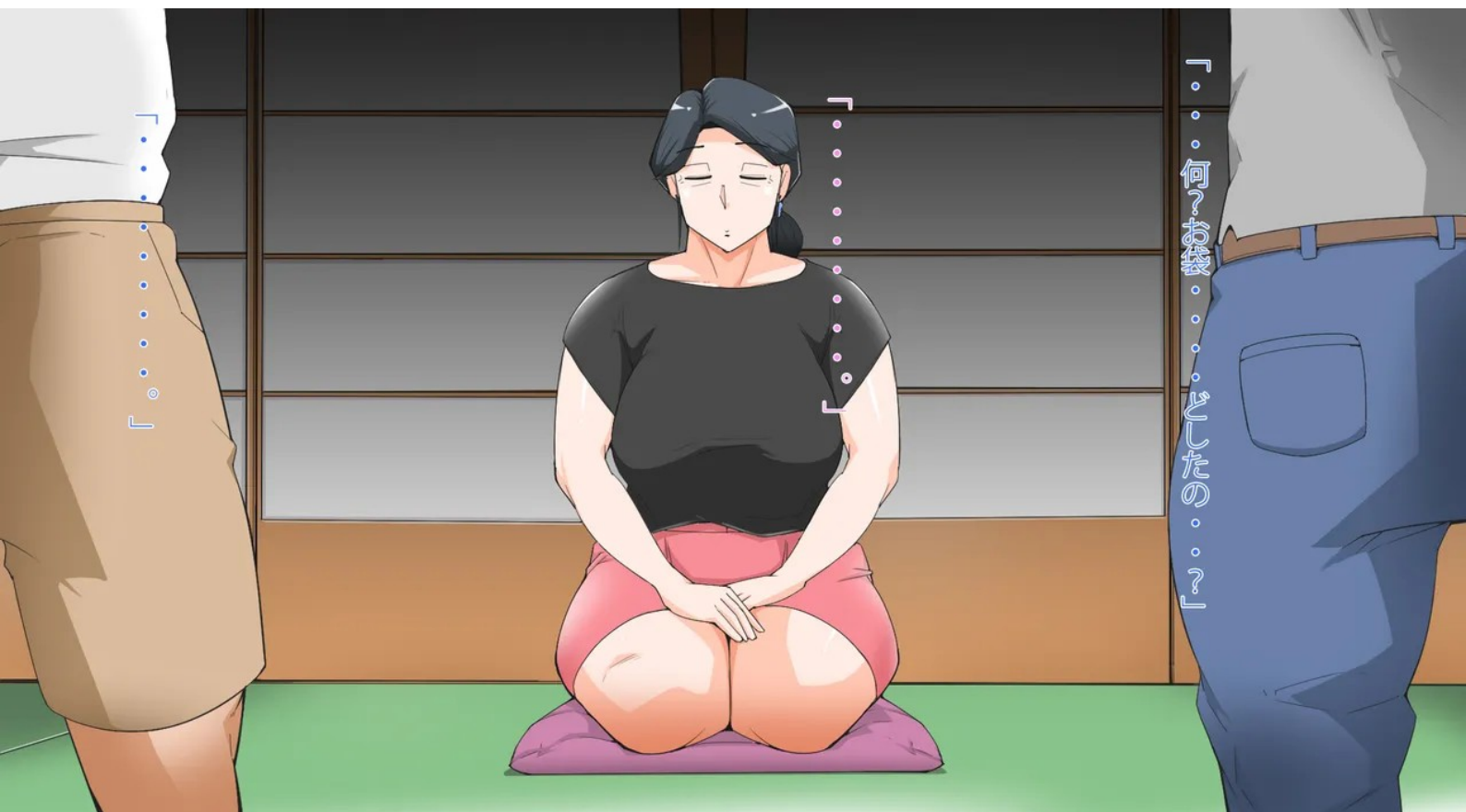
俺と兄貴は顔を見合わせた。妙な違和感を
感じながら母の寝室の戸を開けると、静か
に母は正座をして俺たちを待っていた。





「…何…様…の…だ…？」

「…。」



「…何…様…の…だ…？」

「…。」

「…。」



「うん……じつわね……」

「……」

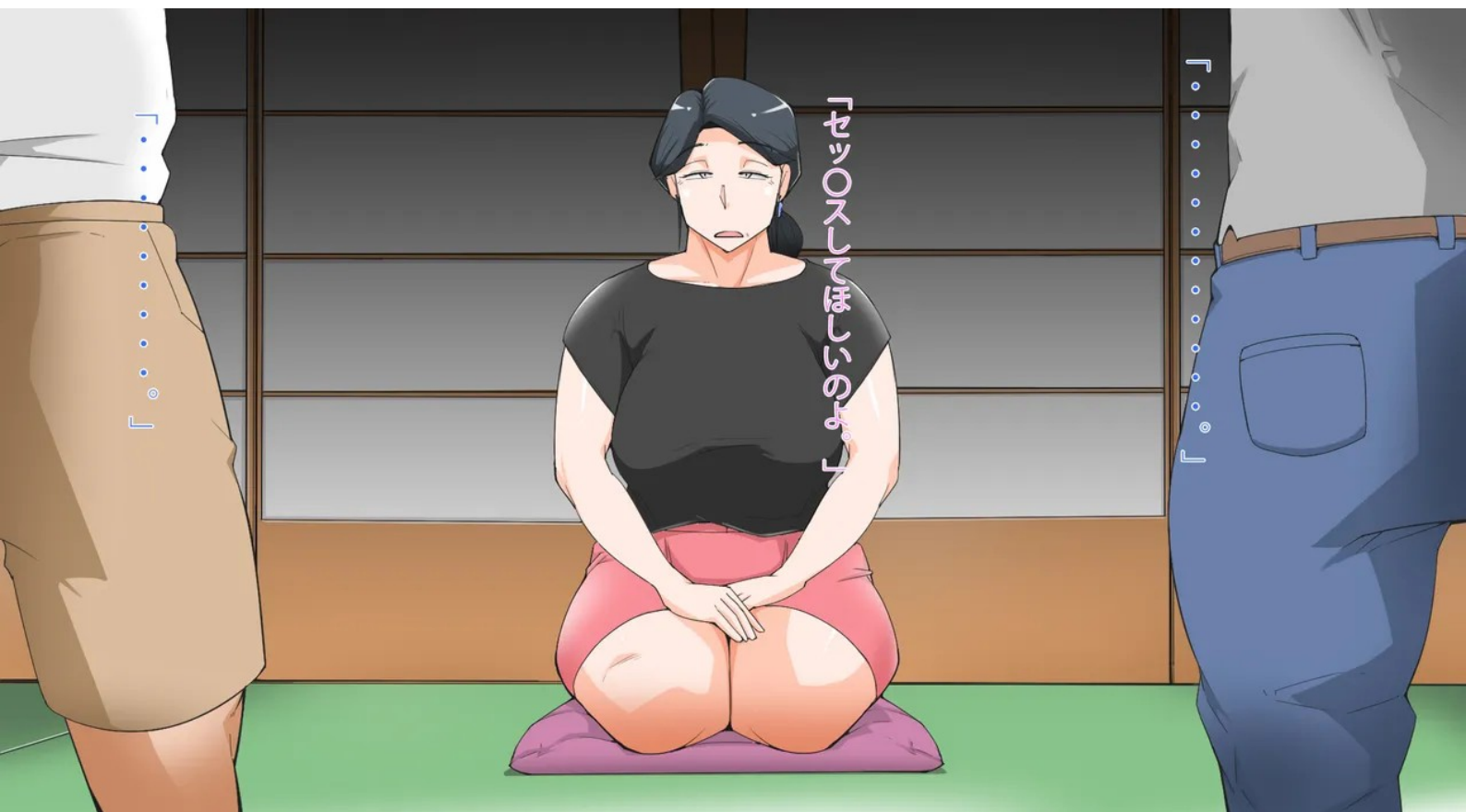
「……」



「今から、かみさんごめ...」

「.....」

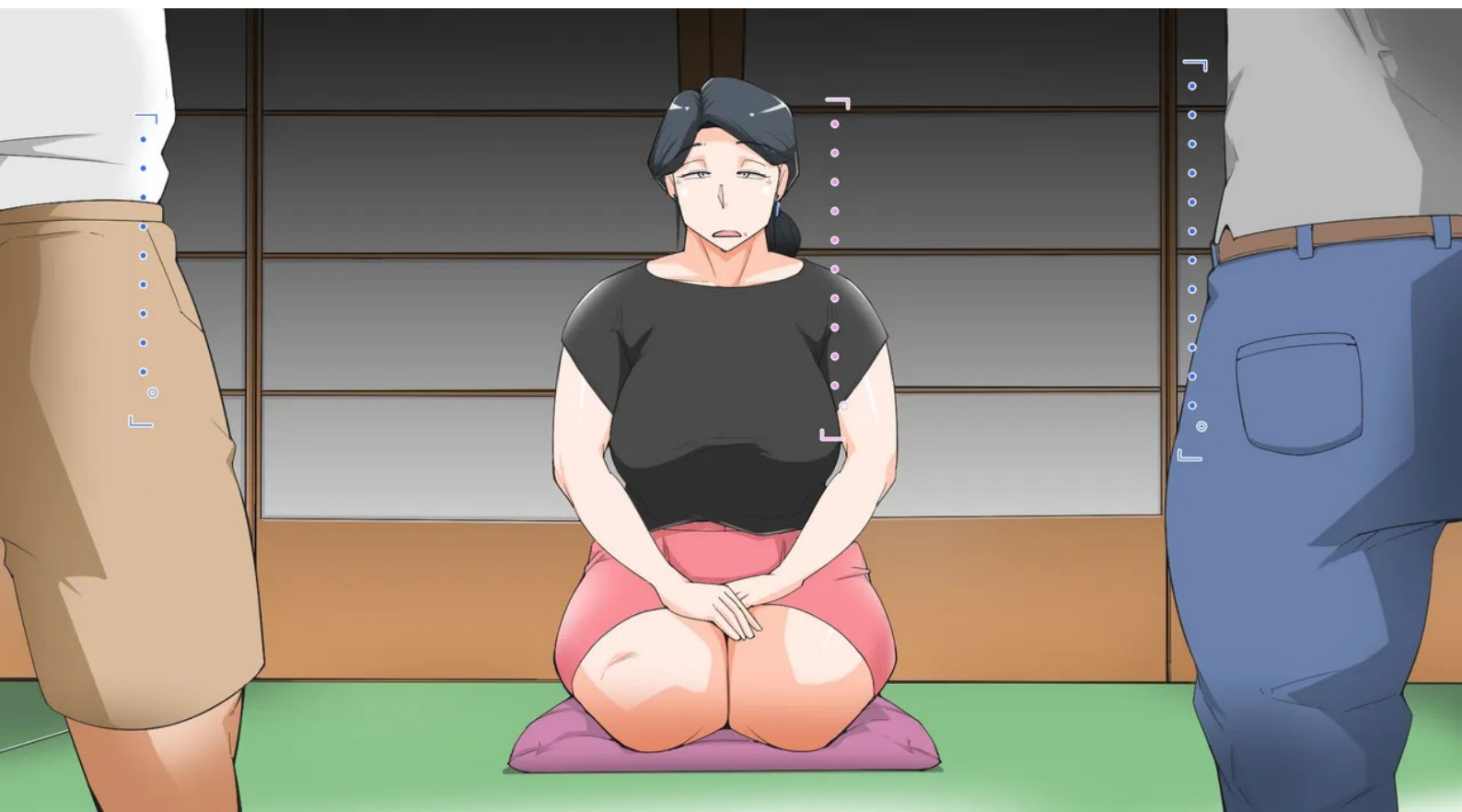
「.....」

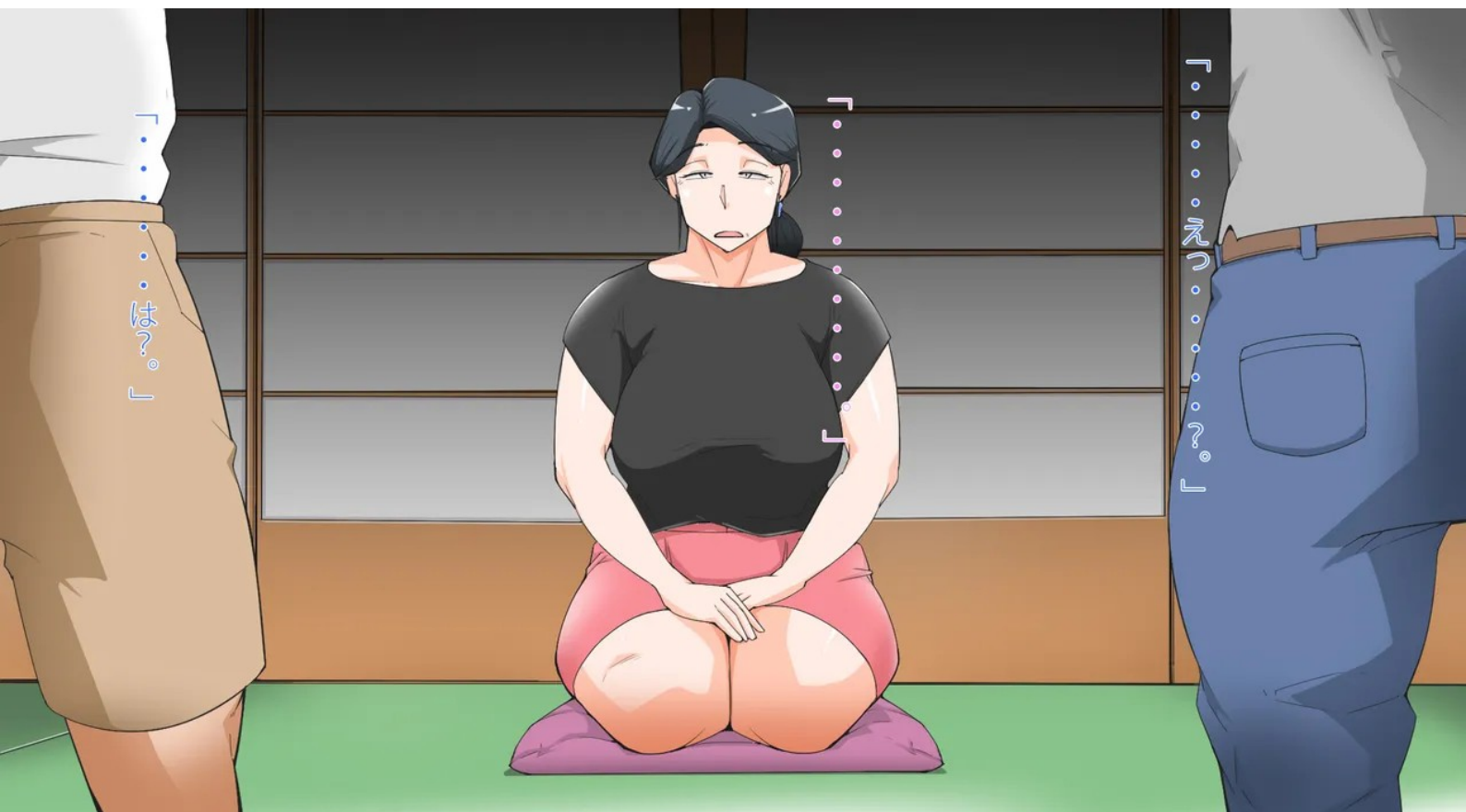


「サッソクマシヨウゾク」

「.....」

「.....」





「.....」

「.....」

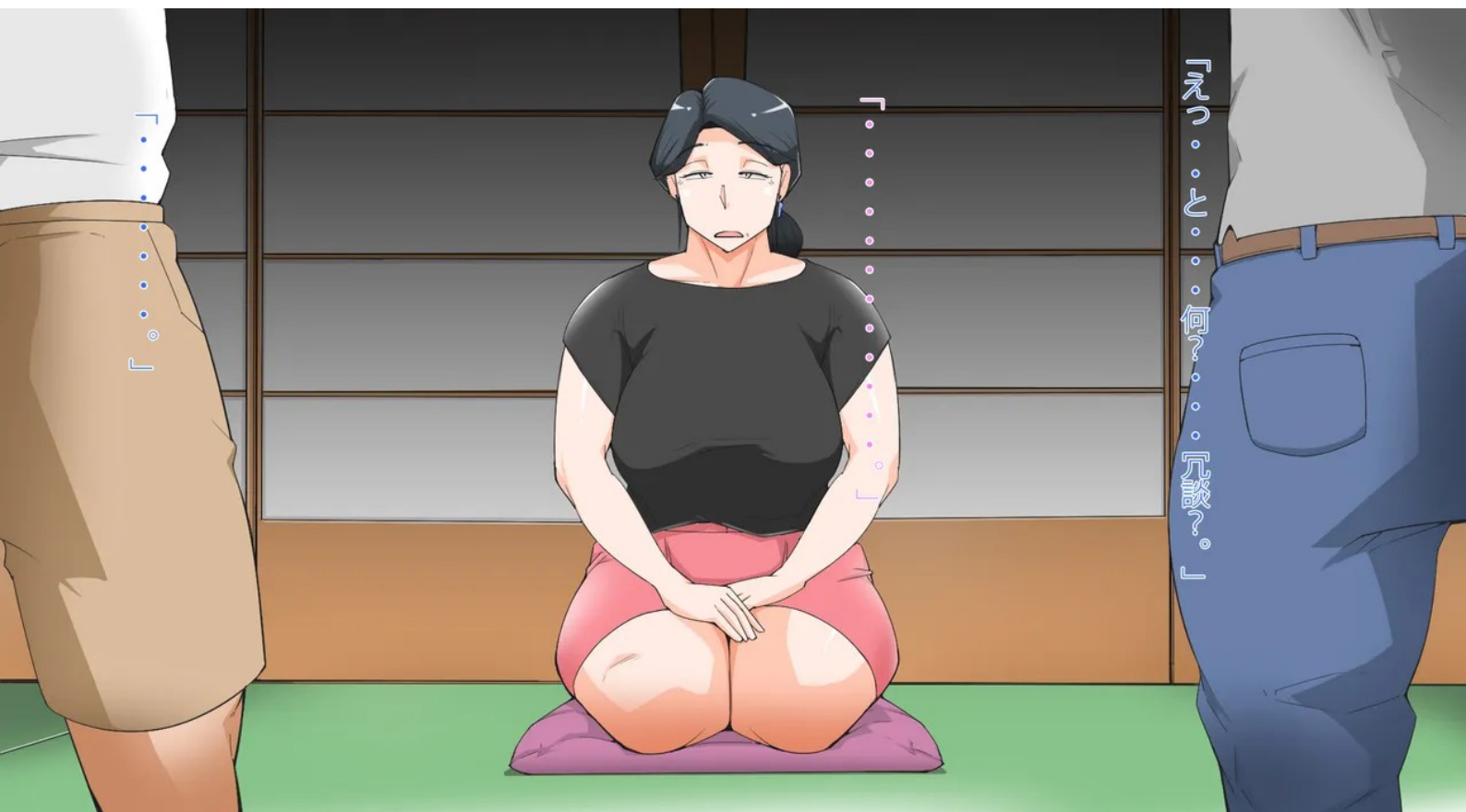
「は？。』」



「.....ん.....?」

「しょうがないのよ.....お母さんじゃ
いないんだもん.....」

「.....は?」



「んっ…んっ…何？…何？…何？」

「…」

「…」

セツ〇ス。。。して。。。ほしい。。。言葉の
意味は分かる、当然。でもその言葉がなぜ
母の口から発せられるのが、まったく理
解ができず、兄貴と二人、ただたちつくし
ていた。微妙な空気が部屋に漂い、充満し
た沈黙を母の言葉が再びやぶる。。。。。



「決まりなの、この村の・・・ホントはね
未婚の若い女性が務めるものなのよ。」



「でも昔から「薄」みんなでいらしてちやうど
からい………母さんがするしかないの。」

「………」

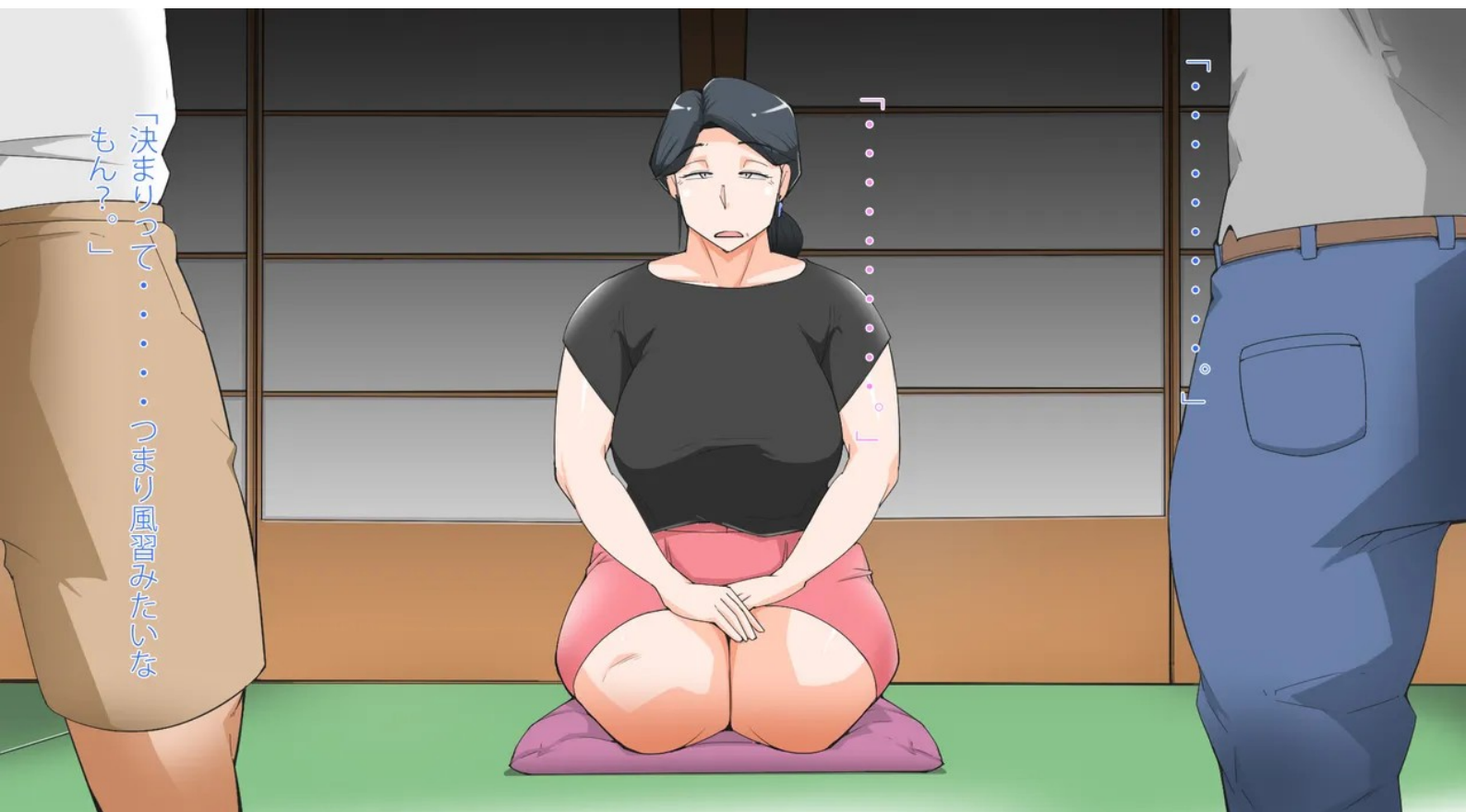
「………」



「……んーと……意味がたくわかんねん
だけど……。」

「でも若う「薄」みんなでいらしてちやうど
から……。母さんがするしかないの。」

「……。」



「決まりって……つまり風習みたいなもん？」

「……」

「……」



「そんな感じよ。せつたいに続けていかな
きやいけない風習……」

「……」

「……」

「わかったら、二人ともお風呂に入って身を
清めてきて。時間がないわ……。」

急ぎ立てられながら俺たちは浴室に向かう。
訳がわからないまま。。。。

「。。。ありやあ。。ポケたなお袋。」

「えー。。まだ五十代だよ。。かあちゃん。」

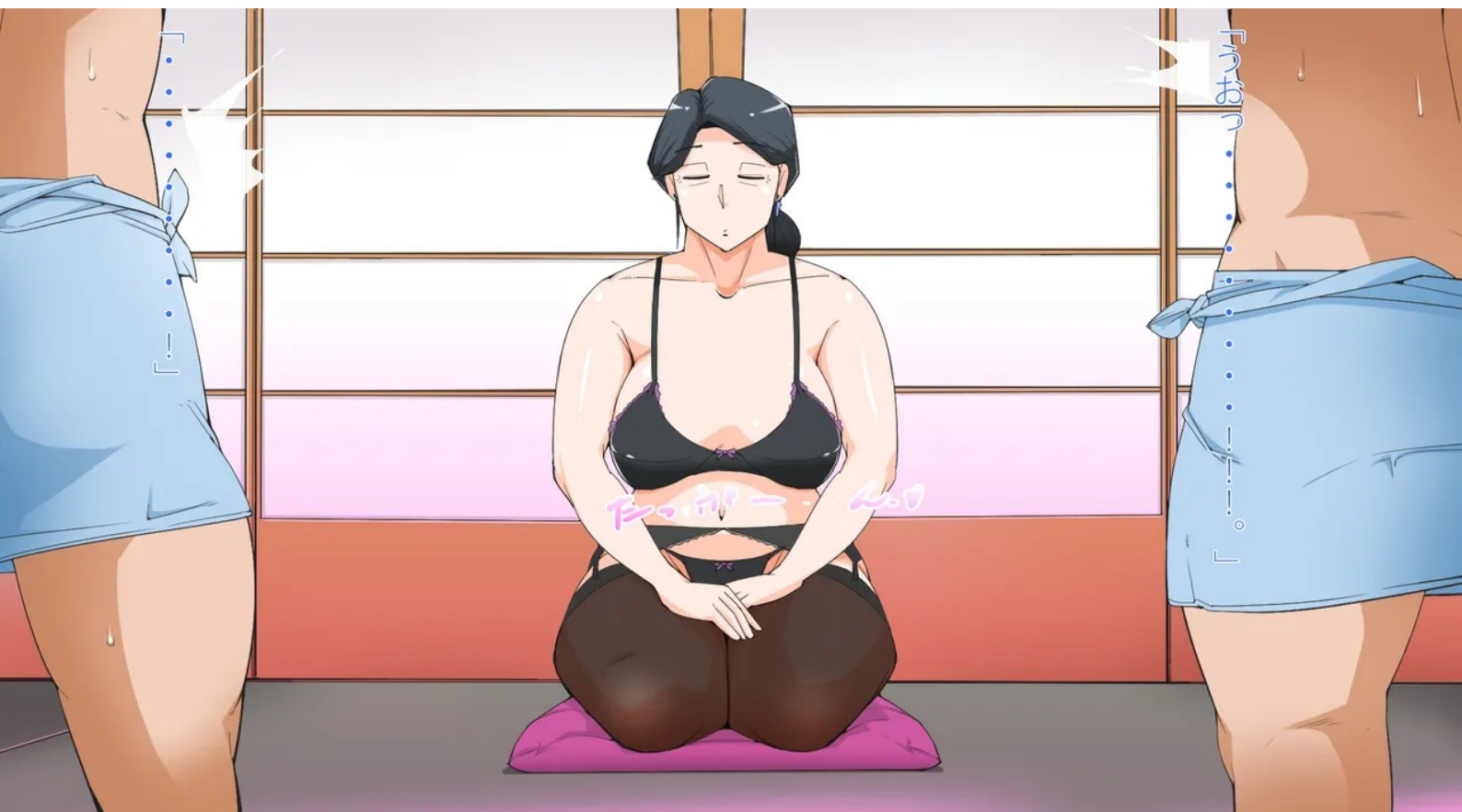
「関係ねえよ、こんななんもねえ田舎で独り暮らししてんだからさ。。おかしくなっちゃったんだよ、きつと。。。」

「。。。。いや、いくら何でもそれは。。。。。」

「あゝあ。。俺はもう嫁の両親の面倒みてっからな、お前がお袋の面倒みんだぞっ。」

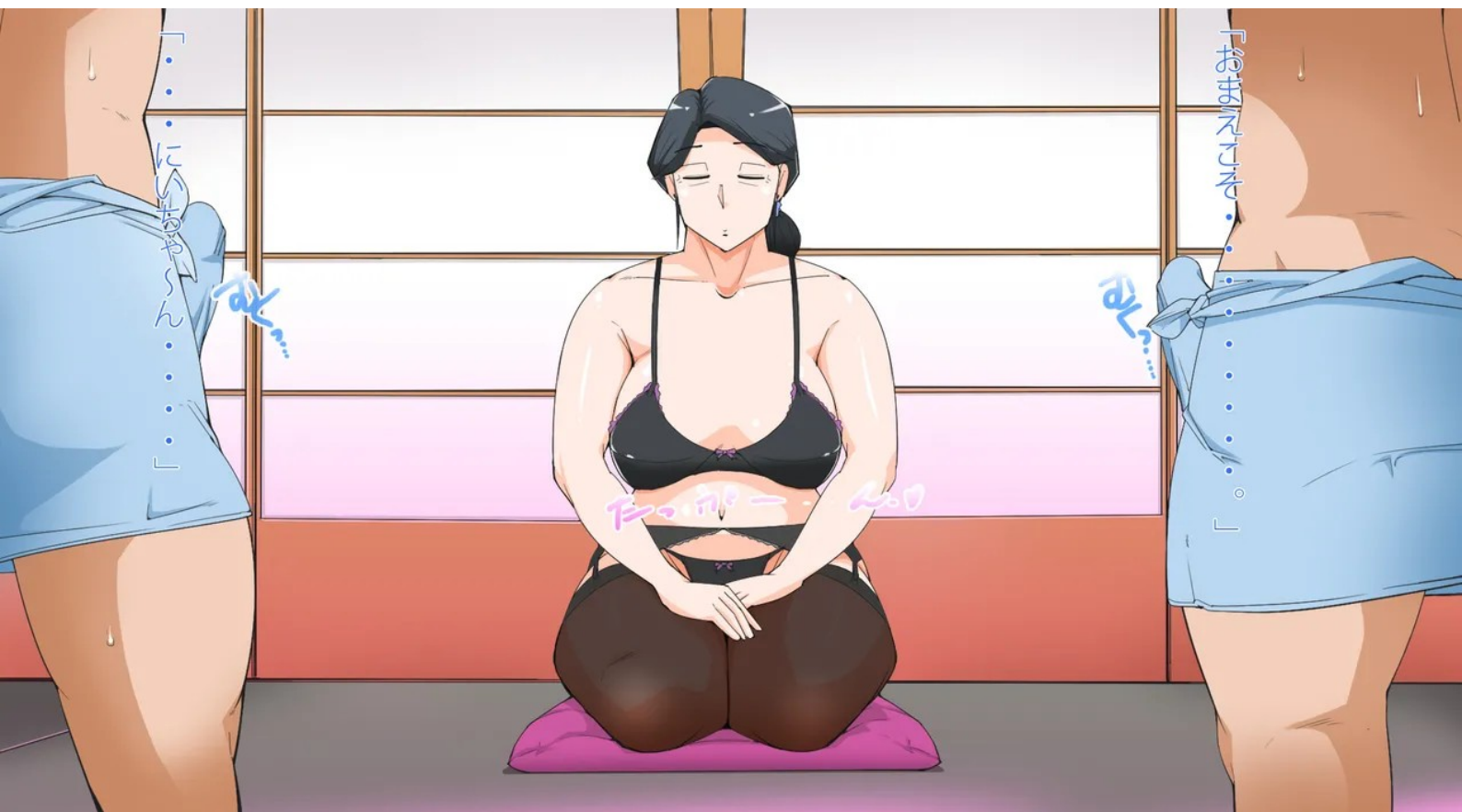
「ええええ。。。。。。まじ〜」

とりあえず風呂からでた俺たちは、もう一度
母をさどろつと寝室の戸を開けた。。。。











「おはようございます……」

あ……

「……勃たなかったらどうしようって心配してたけど……ムダだったみたいだね……アホなコ達でたすか……」

「……おはようございます……」

あ……

「・・・じゃあ始めましょう、ほんと時間がないのよー。」



「.....んん.....」

「.....おお.....」

「.....んんんんんんんんんん.....」

おちっ♡♡



お袋は聞きなれない神様の名前などを口にしながら、この奇妙な風習のいわれを説明しているが、俺達兄弟はそんな話などよりも、大人の男として初めて見る、母の艶やかな肢体に心を奪われ、話を聞くどころではなくなっていた。



「.....めっちゃいらいほ.....♡。」

「.....ほんまっで.....車輪お.....」

「.....はあ.....はあ.....」

ほんまっで



「.....」

「.....」

「.....んじゃ.....失礼して.....」





【.....♡♡♡♡】

【.....たまらんわぁ♡♡♡♡♡♡.....♡♡♡】

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん





「.....♡♡♡♡」

「.....よかつ.....躊躇なく
母親つ.....いけるっ
わねっ.....」

「じつわけっころスリネタにさせて
もらってたから♡えへっ♡」

あーっ
あーっ
あーっ

おっ



「...えへっ...おしやないわよ...んっ♡」

「じつわけっころスリネタにさせて
もらってたから♡えへっ♡♡」

おしやないわよ...んっ♡

「.....♡♡♡♡」



「…えっ…おっ…んっ♡」

「おおっ♡肉厚でツニーな…
現役感ありまくりのオマ○っ♡」

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

「…♡♡♡♡」



「んっ!!...」あっ...だめっ
そんなっ...
甜めかたっ...
「っ...」

「.....♡♡♡♡」

「っ...」
「っ...」
♡♡♡♡

「.....♡♡♡♡」



「.....♡♡♡♡」

「お袋っ♡もっがまんてっ
ないんだけどっ.....♡♡♡♡」

「.....♡♡♡♡」

しっしょっ♡♡♡♡
あっ♡♡♡♡
あっ♡♡♡♡

お袋っ♡



「.....♡♡♡♡」

「.....♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「.....♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

兄貴にガン突きされながら、思わず漏れ出る嬌声を必死にこらえようとしている母を見ながら、中坊の頃、母や母の下着をオカズにしてオナニーしまくっていたことを思い出していた。五十路を迎えた母だが、大人になった俺達にとっては母はあの頃よりも何倍も魅力的なセックスシンボルへと変化を遂げていた。。。。。

「……………はあっ……………はあっ……………じゅ……………
圭太……………。」

「……………♡……………」





あつんっ！♡んんっ♡んあっ！♡♡♡

「…あつんっ♡んんっ♡んあっ！♡♡♡」

「…あつんっ♡んんっ♡んあっ！♡♡♡」

あつんっ♡んんっ♡んあっ！♡♡♡



「あん♡ふっ♡二人ともっ♡しっかり大人になって
♡あ♡ん♡つ♡かあさん♡っ♡うれしいわっ♡♡♡」

「♡は♡あ♡ん♡♡あ♡ん♡♡♡♡♡」

「♡は♡あ♡ん♡♡あ♡ん♡♡♡♡♡」

「♡は♡あ♡ん♡♡あ♡ん♡♡♡♡♡」

「あ♡ん♡♡あ♡ん♡♡♡♡♡」

「♡は♡あ♡ん♡♡あ♡ん♡♡♡♡♡」

食るように母の体を楽しんでいたが、一時間ほどがたった頃、

「……………あっ…大変っ…もうこんな時間……………!。」

すくっと立ち上がって急いで浴室に向かう母。

「アンタ達の相手だけしてるわけにいかないのよ……………まだこれから何件か回らないと……………」

いそいそと身支度を整えながら、母はこの奇習のルールを説明してくれた。聞けばあと二日の間に村中の成人男性と交わらなければならぬらしい。三十年前、母がまだ独身だった頃に務めた時に比べれば、大分、人口も減って負担も軽くなつてはいるようだが……………。

「それじゃ行ってくるわね。帰りはちょっと遅くなるかもしれないから……………夕飯は用意してあるからねっ。」

いつものさばさばとした母親の様子も、さつきまでの乱れたオンナの顔を思い出すと、ギャツプ萌えが止まらない……………。

「……………おい……………」

「……………うん……………」

俺たちはこっそりと母の後を追った……………。

大き目のケツをこぎみ良く揺らしながら、母は村の集会場へ入っていった。。。。。

「。。。もう半勃ちしてきた。。。。」

「。。。俺も。。。。」

中に入ると閉め切った奥の部屋から母の声が漏れてきた。

「。。。すみませんね、私なんかで。。。。」

「いやいや、皆喜んでるよー！ウチの倅もめつたに帰ってこねえのに、陽子ちゃんの名前きいたらすっとなんで帰ってきたよっ

」♡。

しばらく田舎のご近所付き合い的な談笑が続いた後、すうつと静かになりこそこそと物音が聞こえ始めた。。。。。

「。。。そろそろ。。。。」

「。。。おう。。。。」



「.....」

「.....」

.....

扉の向こうでは全裸にされた母に数人の男達が
群がっていた。仲のいい同級生の親父や、近所
に住んでる農家のオッサンなど、男達の顔ぶれ
はいずれも、子供の頃から見慣れたもの達ばかりだ。。。。。

これからこの連中に母ちゃんが。。。そう思うと
嫉妬や怒りや、いろんな感情が沸き起こってめち
やくちゃ興奮してきた。





「・・・くぅ〜こりやあたまらんっ♡前回の「御務め」もよかったが、今の陽子ちゃんの方が何百倍もエロいぞい♡」

しゃばり♡
しゃばり♡
しゃばり♡

しゃばり♡
しゃばり♡
しゃばり♡

んおっ！♡んんっ！♡はむんっ！♡

しゃばり♡
しゃばり♡
しゃばり♡





「・・・すげえ〜お袋♡クンニでイカされながら
じゅくんして・・・♡♡♡。」

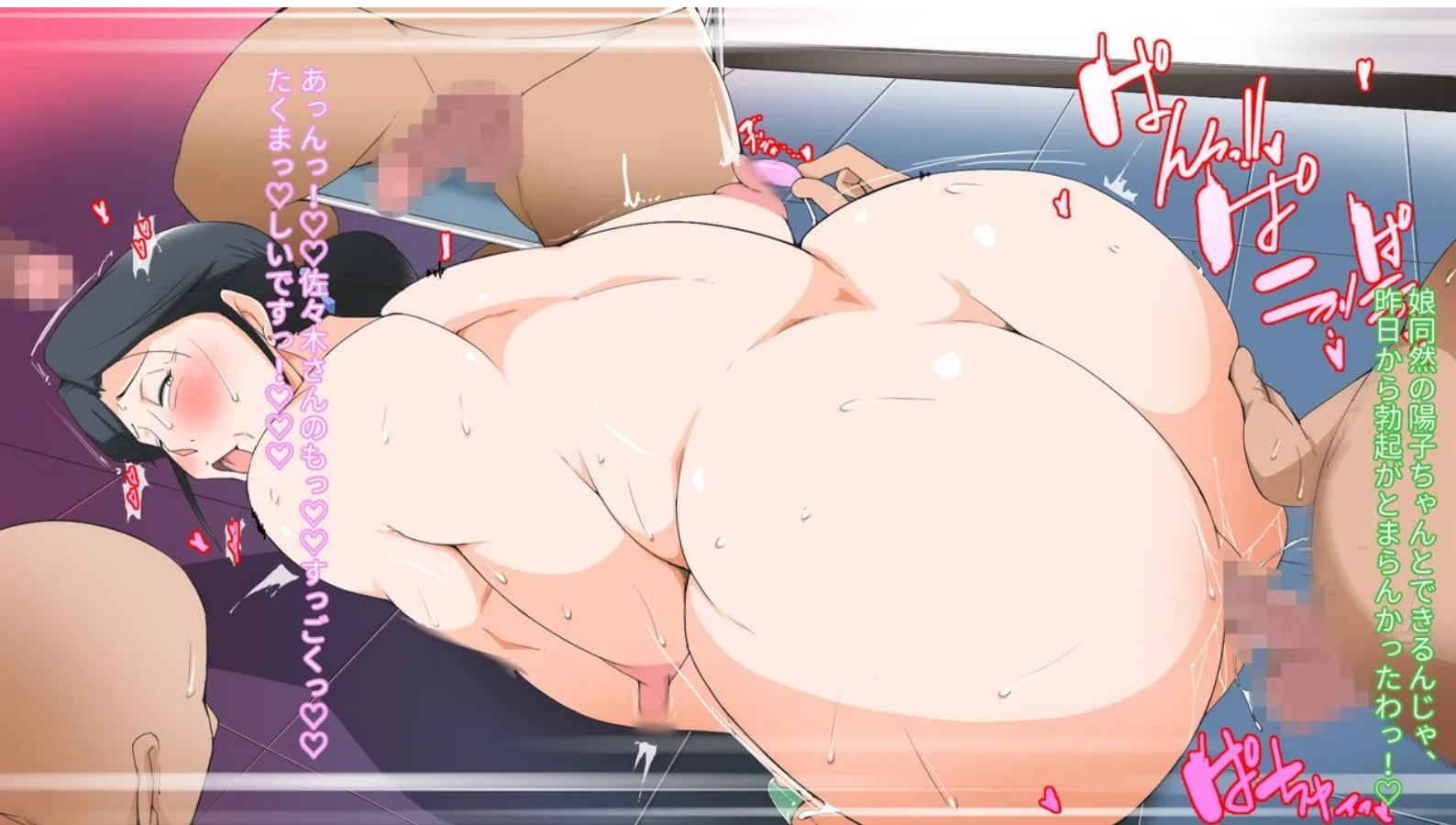
んんんっ♡んんんっ♡んんんっ♡
んんんっ♡んんんっ♡んんんっ♡

んんんっ♡

「・・・俺も後で飲んでもらおう・・・♡♡」

「♡♡♡♡♡おっおっおっ♡♡♡♡♡」





あっんっ！♡♡♡佐々木さんのもっ♡♡♡すっ♡♡♡へっ♡♡♡
たくまっ♡♡♡しいですっ♡♡♡

ゴッ♡♡♡ん♡♡♡
ゴッ♡♡♡ん♡♡♡

娘同然の陽子ちゃんとできるんじや、
昨日から勃起がとまらんかったわっ！♡

ゴッ♡♡♡ん♡♡♡



娘同然の陽子ちゃんとできるんじや、昨日から勃起がとまらないかったわっ！♡

うれっ♡しいですわっ♡♡♡遠慮なく申し出しちゃって
くださいねっ♡♡♡わっ♡♡♡もうっ♡♡♡おわっ♡♡♡入っ♡♡♡すからっ♡♡♡



うれっ♡しいですわっ♡♡♡遠慮なく申し出しちゃっ
てくださいねっ♡♡♡わたくしもうおわっ♡入来すからっ♡♡♡

そうが♡母親の務めを終えてっ♡♡♡
人の女に戻ったっ♡ちゆうことじゃなっ♡♡♡



はあっ！♡はあっ！♡ああんっ♡あんっ！♡♡♡

ゴッゴッゴッ
ゴッゴッゴッ

よっしやっ♡このおいぼれの特濃精子
♡たっぷり受け取ってくれい！♡♡

ゴッゴッ



(..またっ♡メッ..てるっ♡♡あたしっ..
こんなっ♡♡..感じ易かった..♡♡♡♡)

びんびん♡

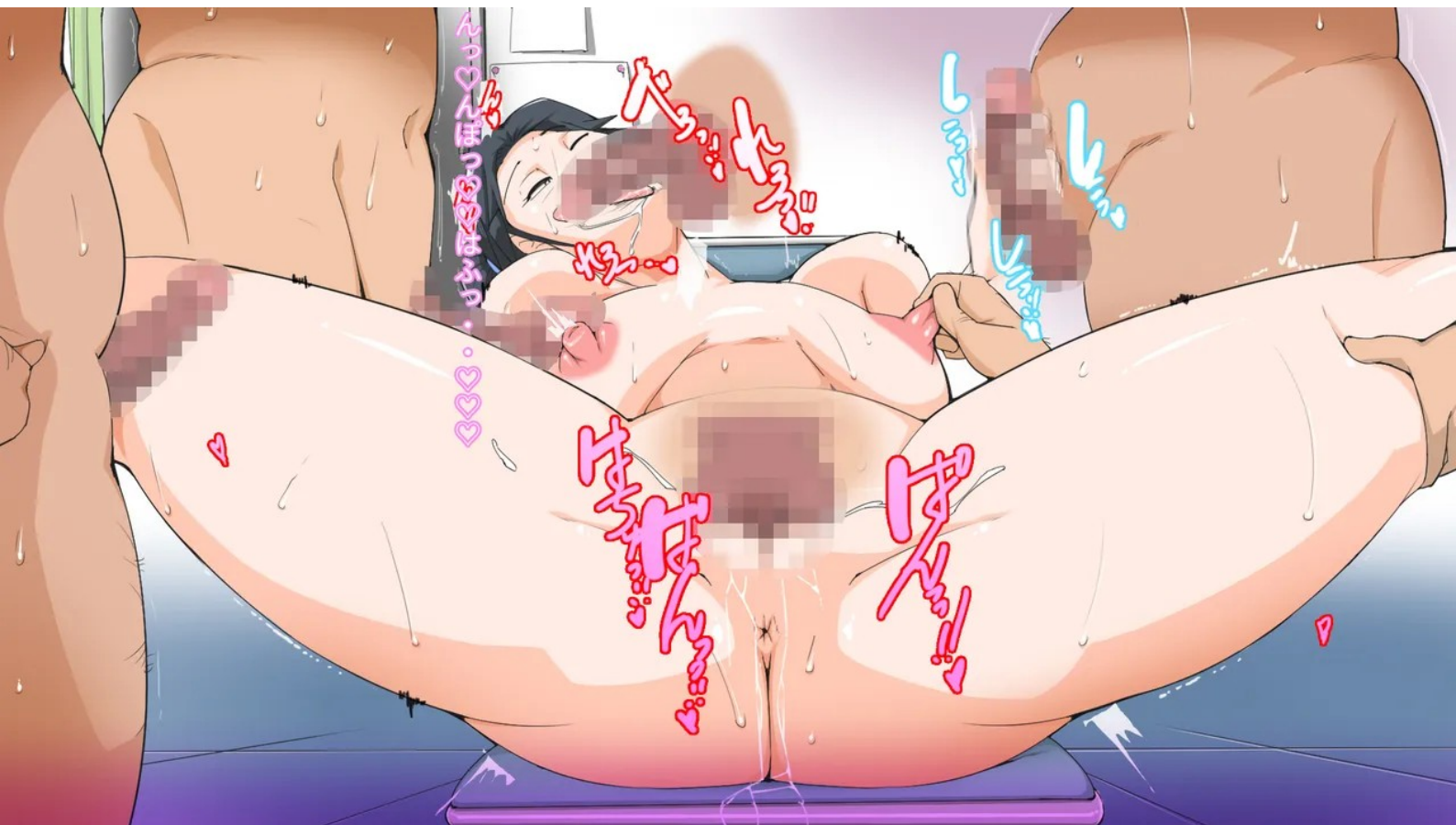
びんびん♡

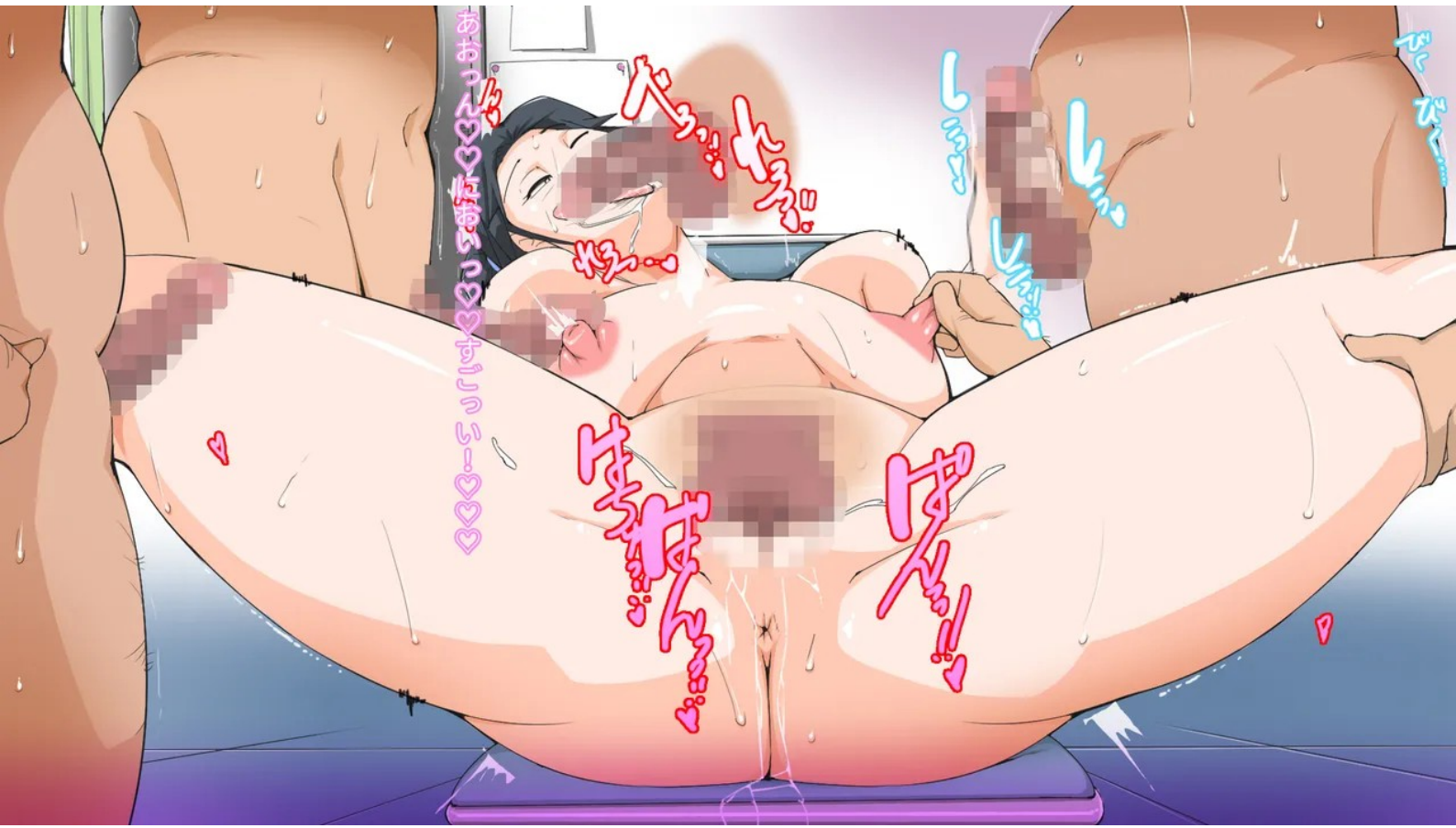
びんびん♡

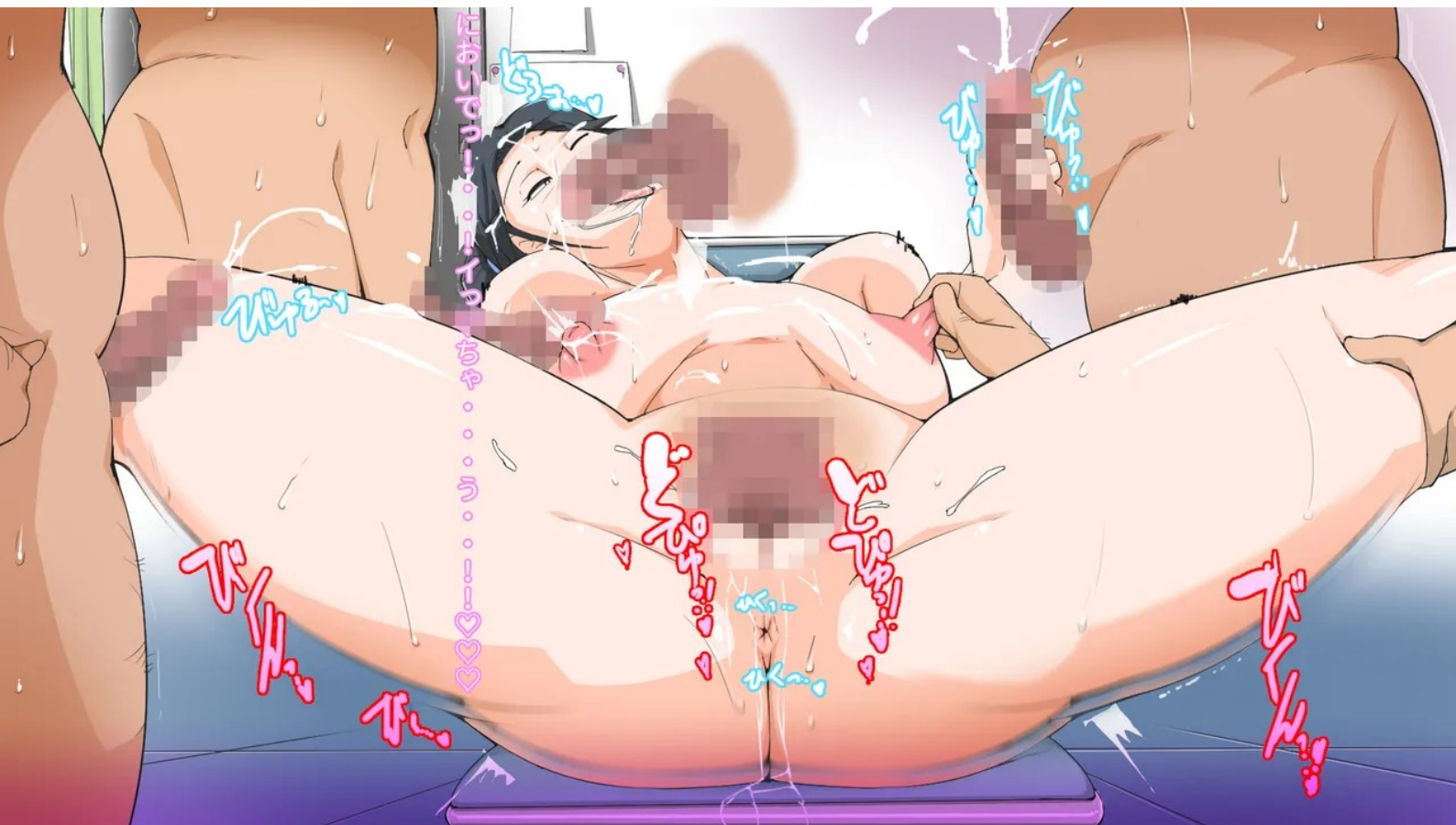
びんびん♡

びんびん♡

♡♡♡♡♡







「くっそ・佐々木のじじい達、ひとんちの母ちゃん
で好き勝手やりやがって……！」

「……まあ、このふざけた風習のおかげで俺ら
も母ちゃんとヤレるんだし……そろそろ
お開きみたいだから、戻ろう兄貴。」



「ふう〜。。。ただいまあ。。。。。。」

「はあ♡はあ♡おふへろっ♡もっかい♡よ
〜よっ♡♡♡」

「えっ？。。。無理っ！今日もう無理っ
！ん？。。。まさかあんた達。。。。」

「。。。たのむよお。。。むらむらして寝れない
よっ♡♡♡♡」

「。。。見たのか。。。もお。。。
。。。じゃあ口で抜いたげるから。。。それで
かんべんして。。。。」



おっさんどもの精子なんかより！♡♡♡
息子の精子の方が絶対美味しいからっ♡♡♡
全部飲み干してねっ！♡♡♡

ちゅぽっ♡♡♡

ちゅぽっ♡♡♡

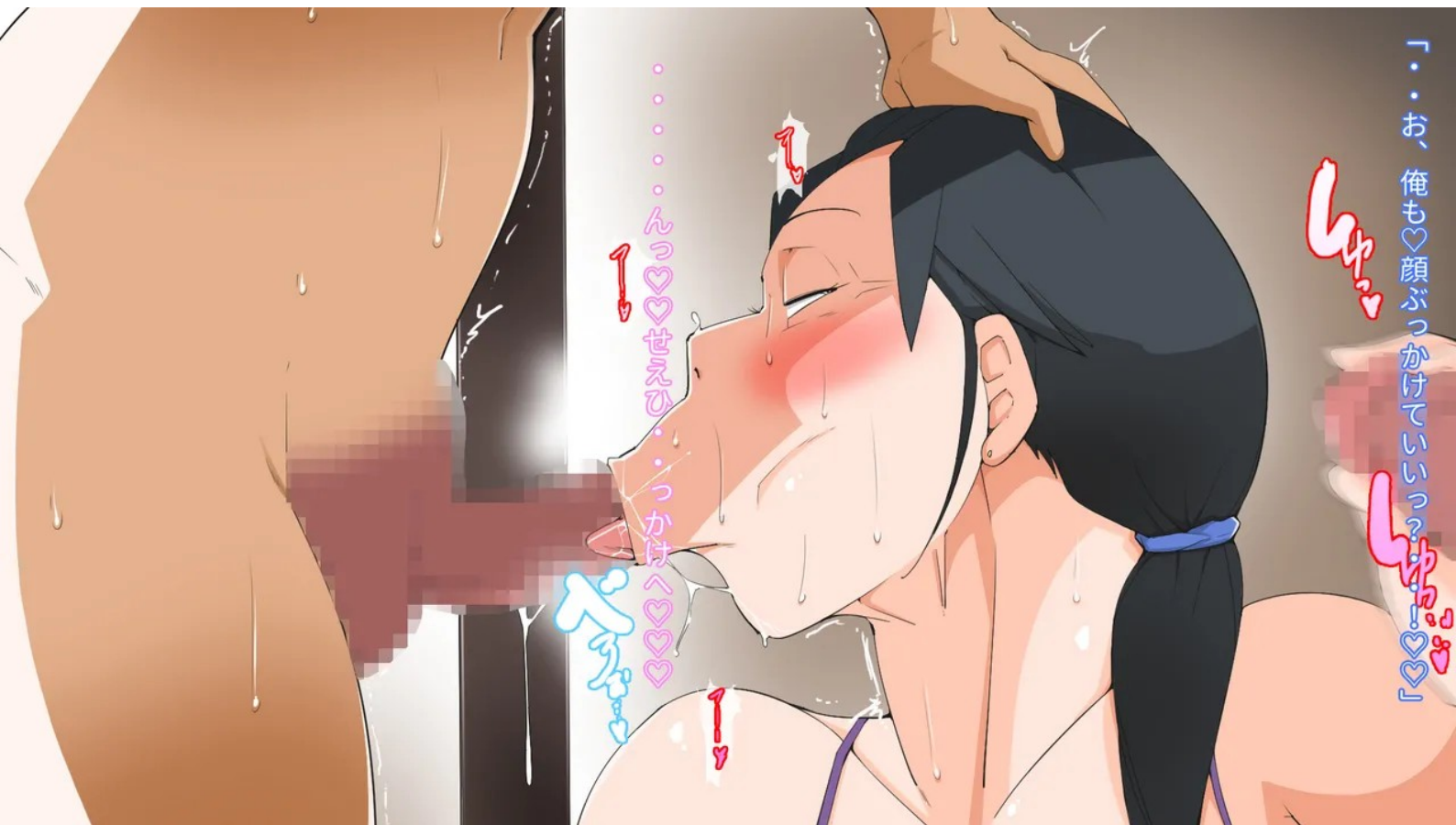
んんっ！♡♡♡んんっ！♡♡♡んんっ！♡♡♡

♡

んんっ♡♡♡

んんっ♡♡♡





「・・・お、俺も♡顔ぶっかけていいっ♡♡♡♡♡」

しゅ♡♡♡♡♡

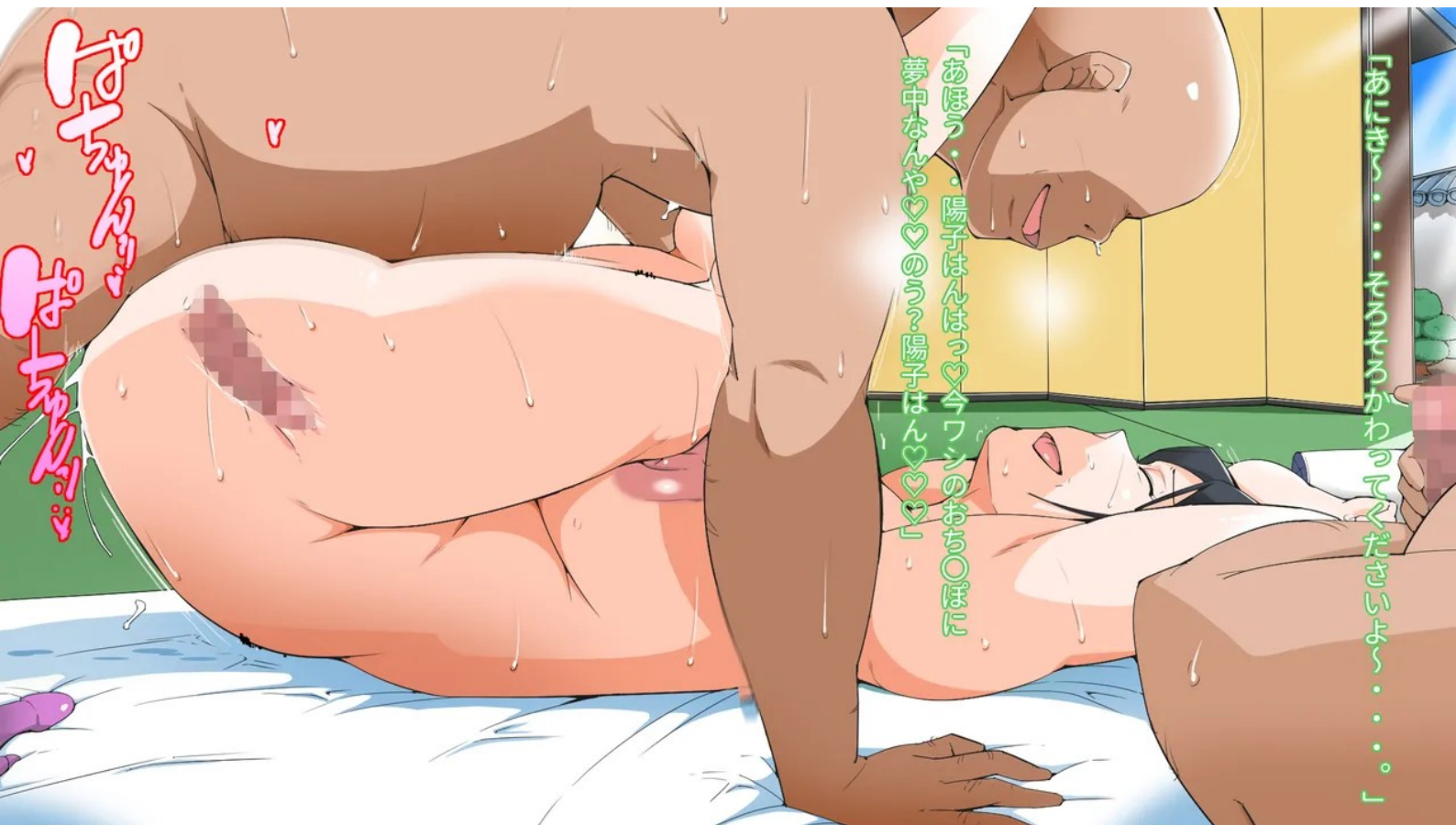
♡♡♡♡♡んっ♡♡♡♡♡はっ♡♡♡♡♡

べっ♡♡♡♡♡

しゅ♡♡♡♡♡



「♡♡♡...っ♡♡♡...っ♡♡♡...っ♡♡♡...」



「あははは...NONNONかかしてんたからよ...」

「あほう...陽子はんはっ♡今ワンのおちOちて
夢中なんや♡のうゝ陽子はん♡♡」

♡ハッ♡ハッ♡♡



「あんなに汗をかいてるのに、汗が止まらない...」

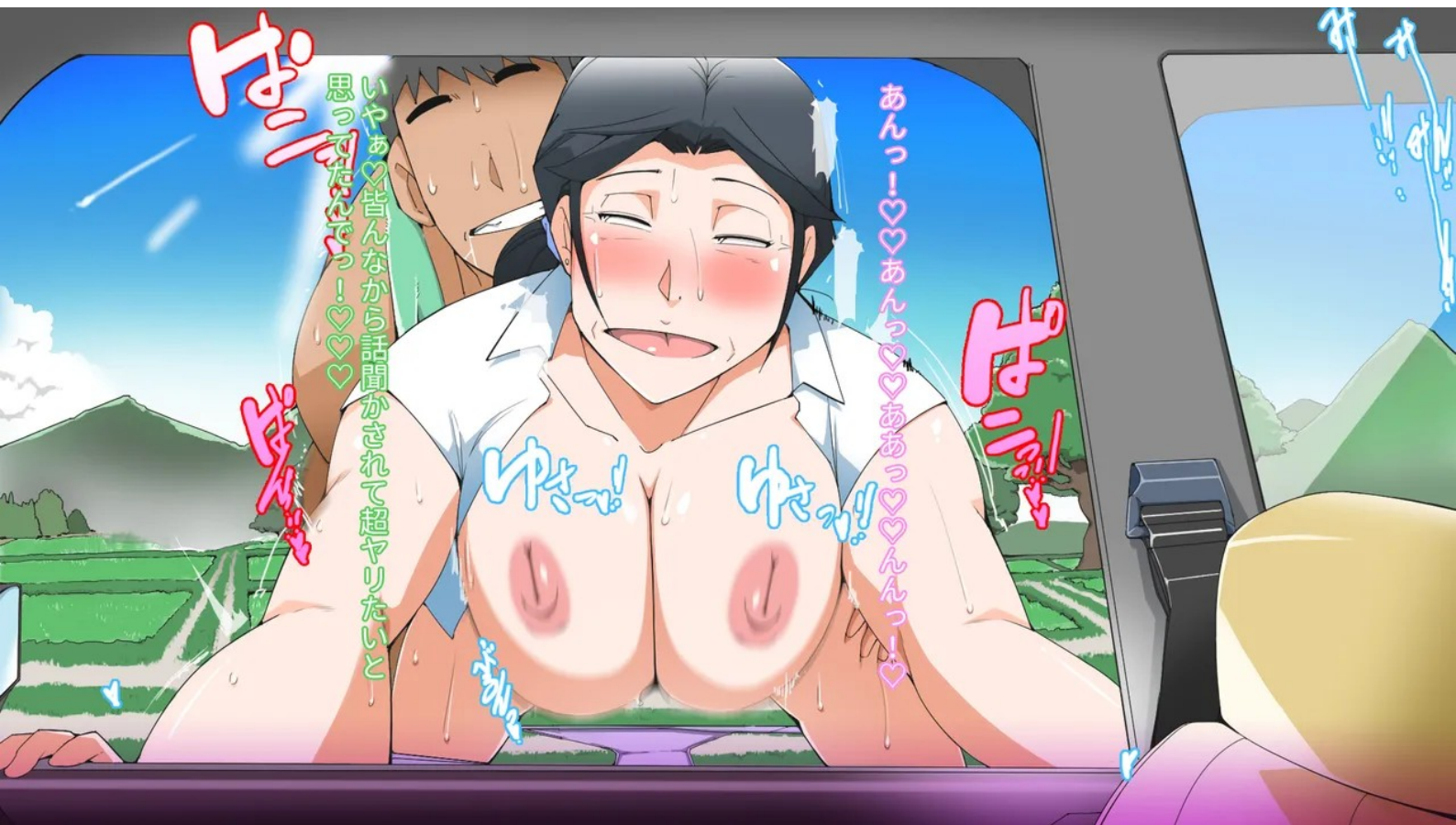
あんなに汗をかいてるのに、汗が止まらない...

Hot Hot Hot
Hot Hot Hot

あんなに汗をかいてるのに、汗が止まらない...







ぽ

いやあ♡みんなから話聞かされて超ヤリたいと思っただんでっ♡♡♡

ぽ

ゆさっ!

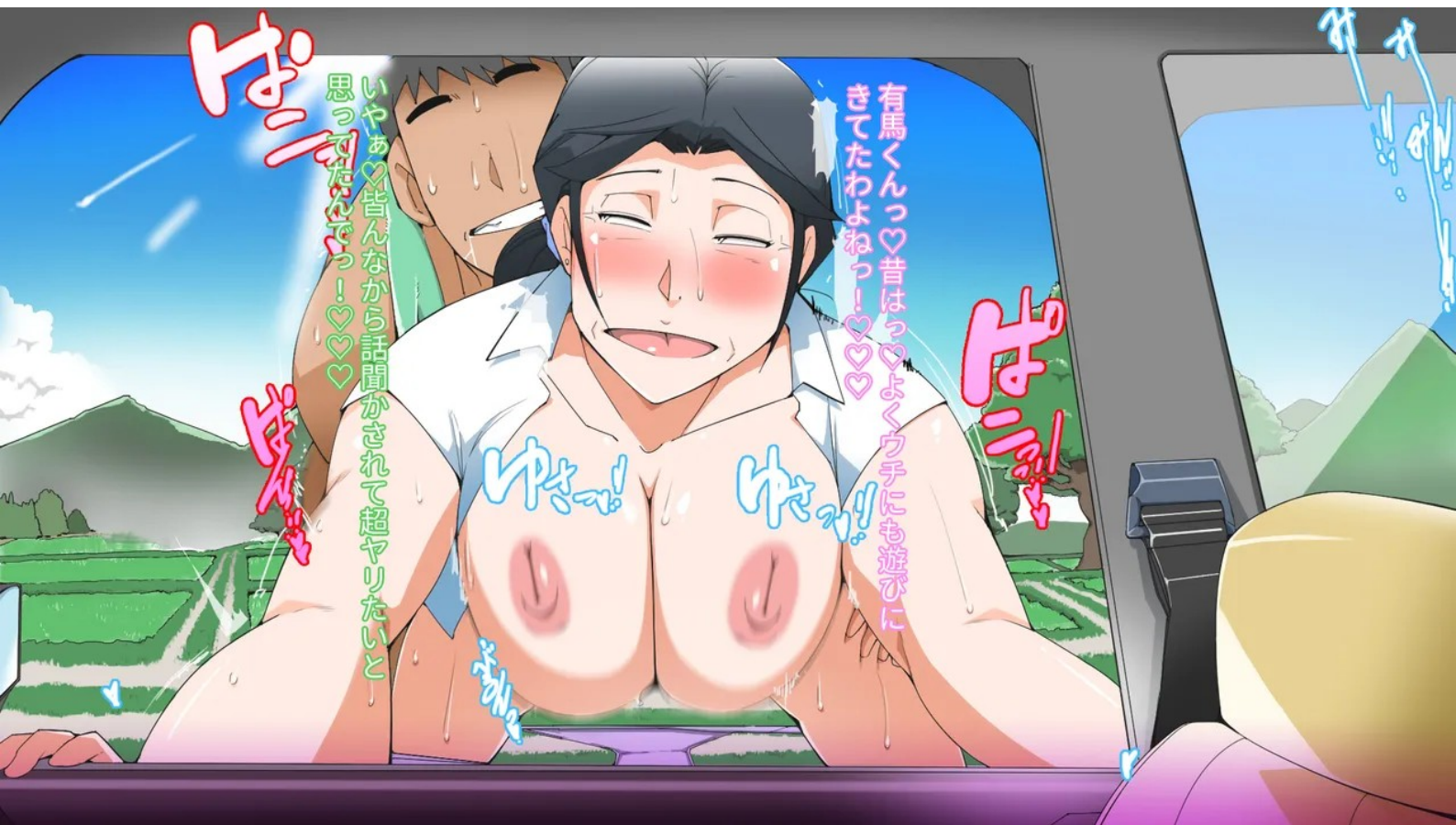
ゆさっ!

ぽ

あんっ♡♡♡あんっ♡♡♡ああっ♡♡♡んんっ♡♡♡

ぽ

ぽ



有馬くんっ♡昔はっ♡よくウチにも遊びにきてたわよねっ!♡♡♡

いやぁ♡みんなから話聞かされて超ヤリたいと思っただんでっ!♡♡♡

ぽっ!

ぽっ!

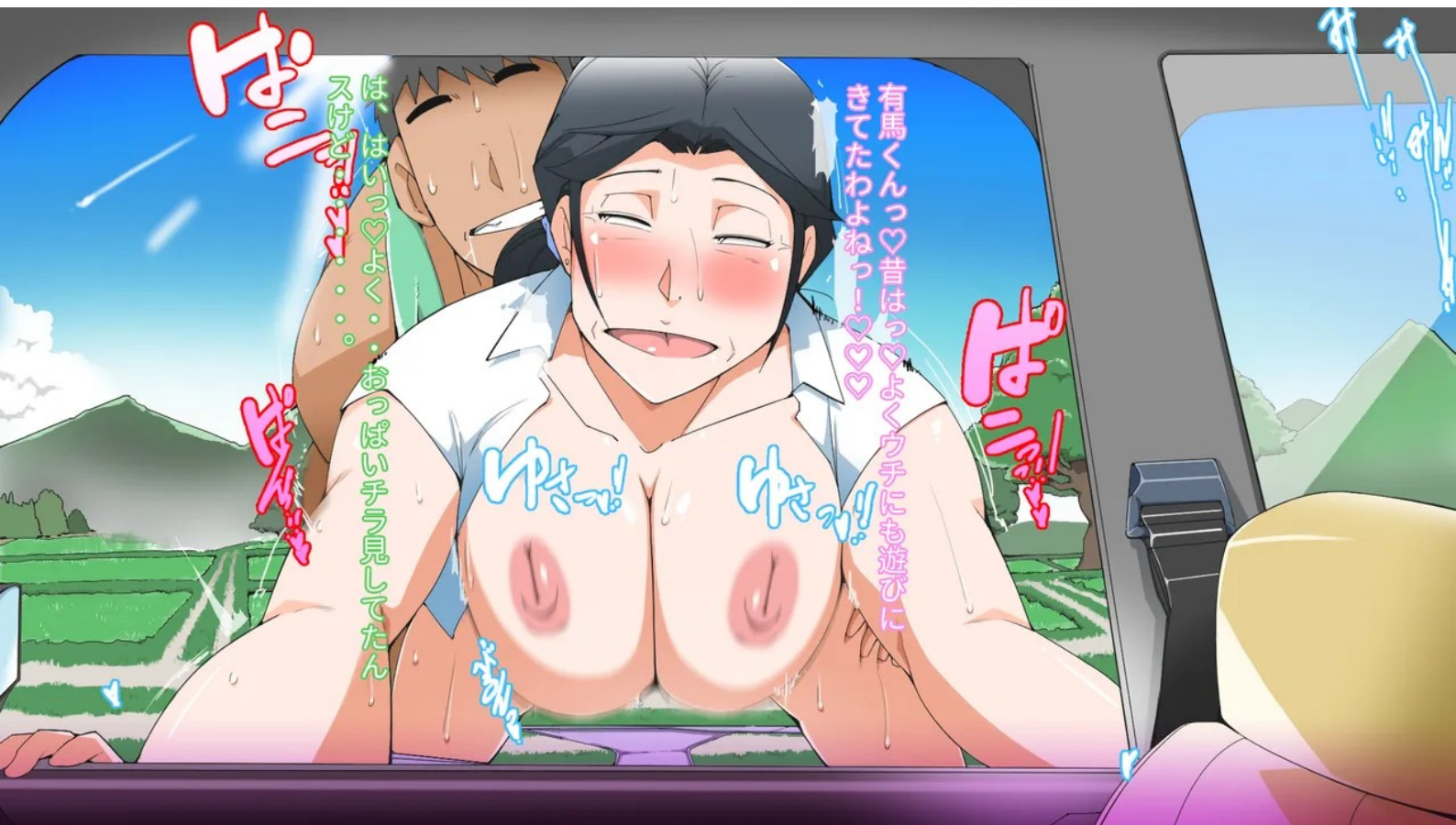
ぽっ!

ゆさっ!

ゆさっ!

ゆさっ!

ぽっ!



ぽん!

ははっ♡よく♡よく♡おっぱいチラ見してたん
スげっ!

有馬くん♡昔はっ♡よく♡ウチにも遊びに
きてたわよねっ!♡♡♡

げっ!

げっ!

げっ!

げっ!



ぽん

ははっ♡よく...おっぱいチラ見してたん
スげえ♡♡♡

ふふっ♡おばさん♡気づいてたわよ♡
あの頃より♡ちよつと垂れちがったかな♡♡

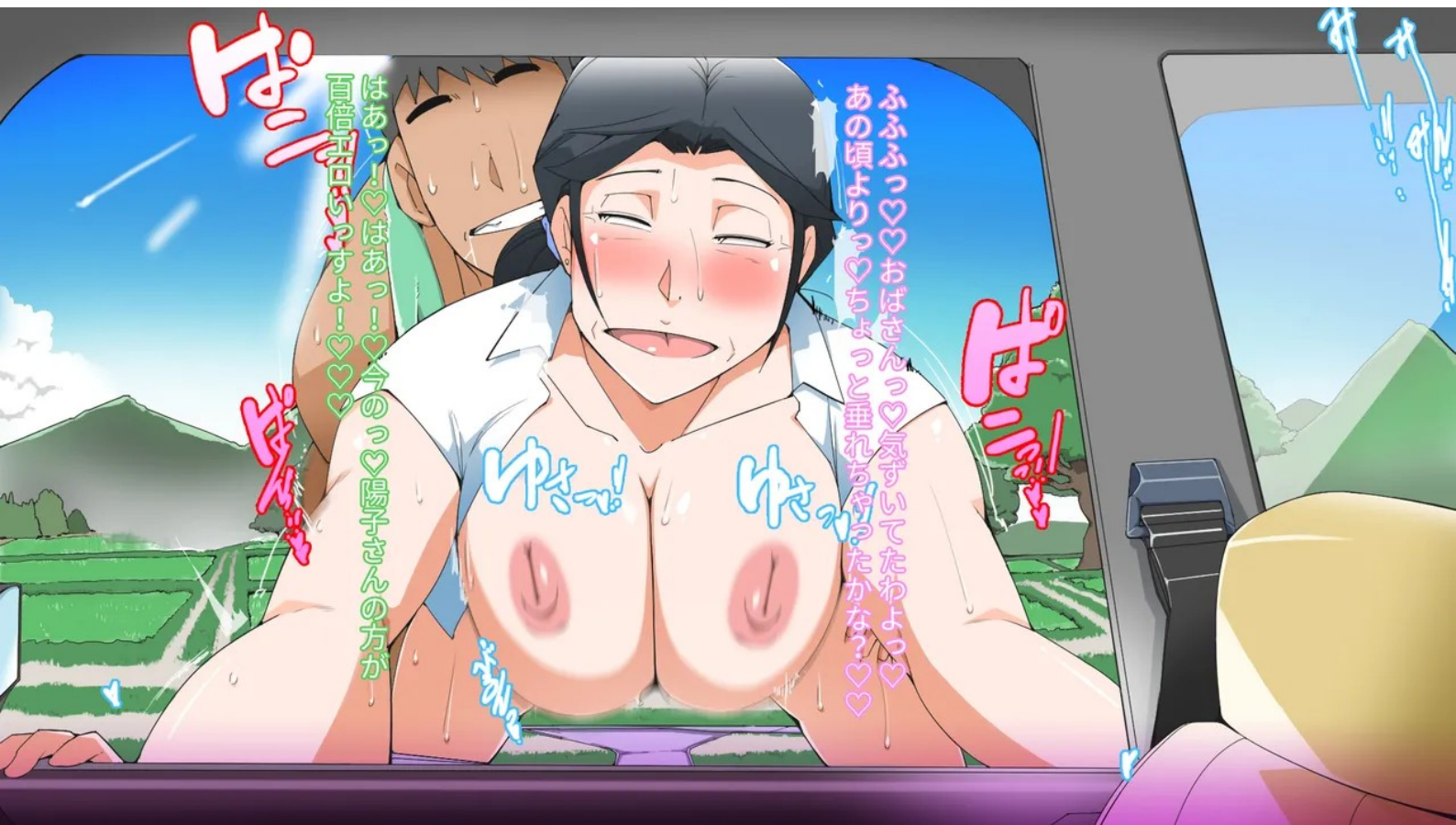
ぽん

けっ

けっ

えっ

わっ



ぽん

はあっ！♡はあっ！♡今のっ♡陽子さんの方が
百倍可愛いですよー♡♡♡

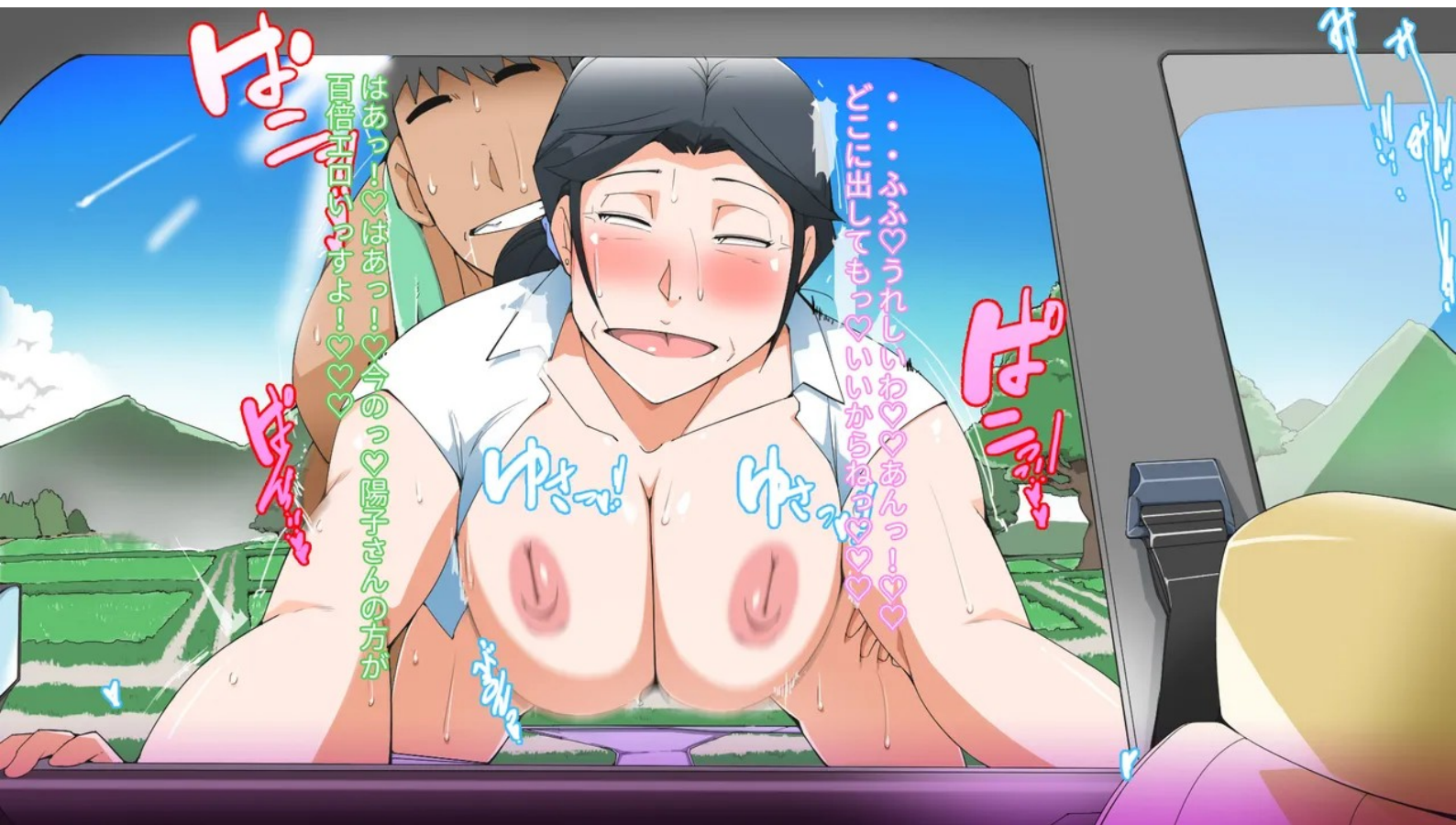
ふふふっ♡おばさんっ♡気づいてたわよっ♡
あの頃よりっ♡ちよっと垂れちがったかな？♡♡

ぱん

けっ

けっ

んん







良かったわねー♡お義父さんっ♡
ずっと陽子ちゃんのファンだったもんね♡

んんん♡んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡

んんん♡んんん♡



陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

そお、でもこれだけお元気ならっ♡♡
まだまだ大丈夫よお♡♡♡♡♡

ちびゅん♡♡♡♡♡

んんん♡♡♡♡♡

んんん♡♡♡♡♡

ちびゅん♡♡♡♡♡

んんん♡♡♡♡♡

んんん♡♡♡♡♡



陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

にそのまま出しちゃって♡私のお口

ちゅぽぽぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡

ちゅぽ♡



ありがとね〜陽子ちゃん!♡♡
居間にお菓子用意してあるからお茶してきなよっ♡♡

だめ...♡コレ飲むとっ♡♡スイッチ
入っちゃう...♡♡♡♡♡

どろどろ♡♡♡♡♡

ふんふん♡♡♡♡♡

だん♡♡♡♡♡



「最後は……村長の家が……。」



「いやいや♡来るなりす♡いがり♡きょう
ですな♡陽子さん♡♡♡♡♡」

「まったく・・・♡さんなにお〇ん♡蒸らし
ながら練り歩いて・・・♡神事を務めてい
る自覚に欠けておりますな♡♡♡♡♡」

ごんっ!♡んんっ!
ごめんなっ♡ひやっ♡
♡♡♡♡♡

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん



「神様にかしづく時には嘘偽りのない澄んだ
心持ちでなくてはなりませんぞ♡」

「まったく・・・♡さんなにお〇ん」蒸らし
ながら練り歩いて・・・♡神事を務めてい
る自覚に欠けておりますな♡♡♡」

ごめんっ!♡ごめんっ!
ごめんなっひやいっ♡♡♡♡♡



「おおっこれはいかん♡神聖な神事を肉欲で汚すとは……♡♡♡」

「こんな堕落した、どすけべ巫女は……♡」

ひんっ!♡♡♡♡♡
ひゃいっ!♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

ひんっ!

ひんっ!

どすけべ

ひんっ!

ひんっ!

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

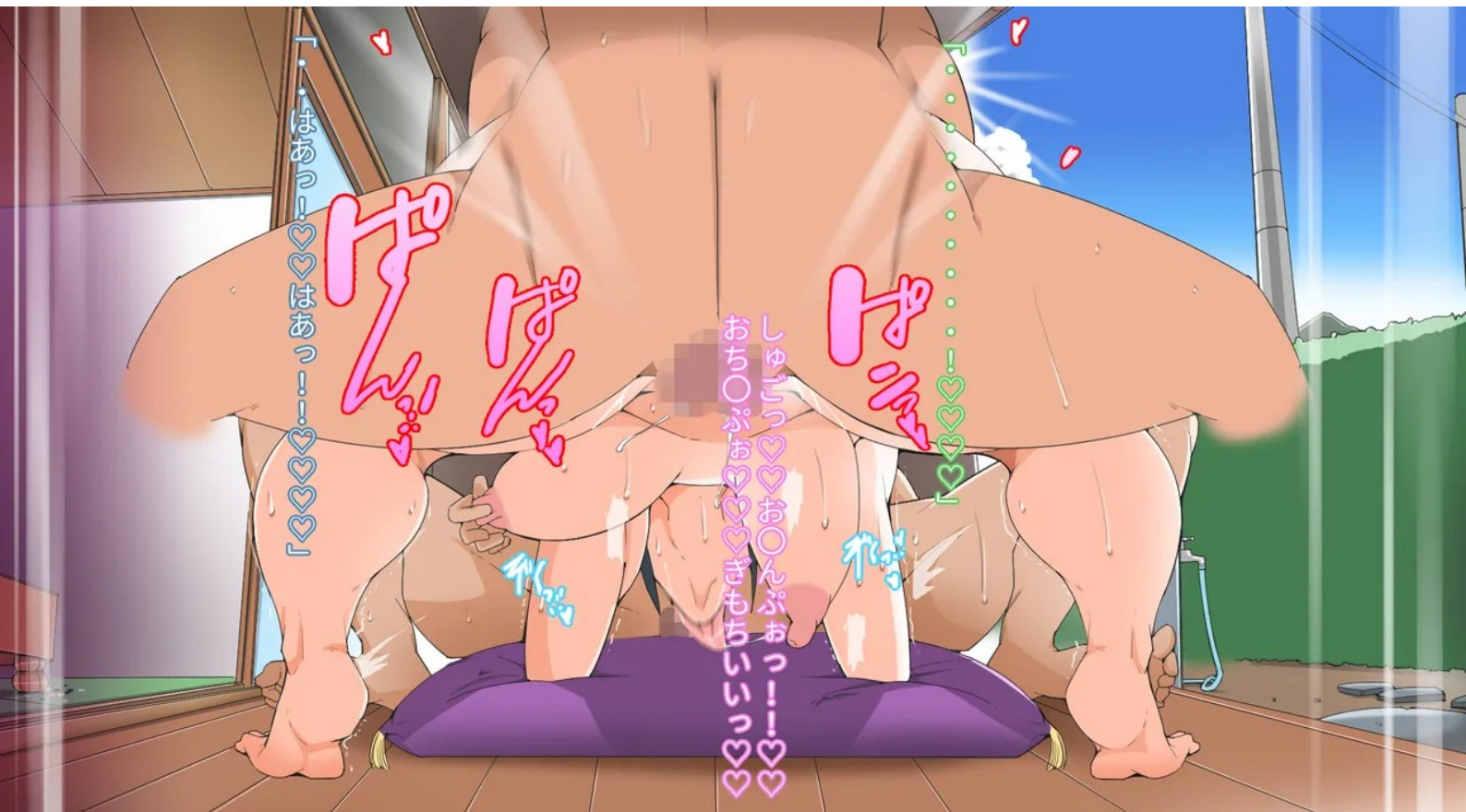
♡♡

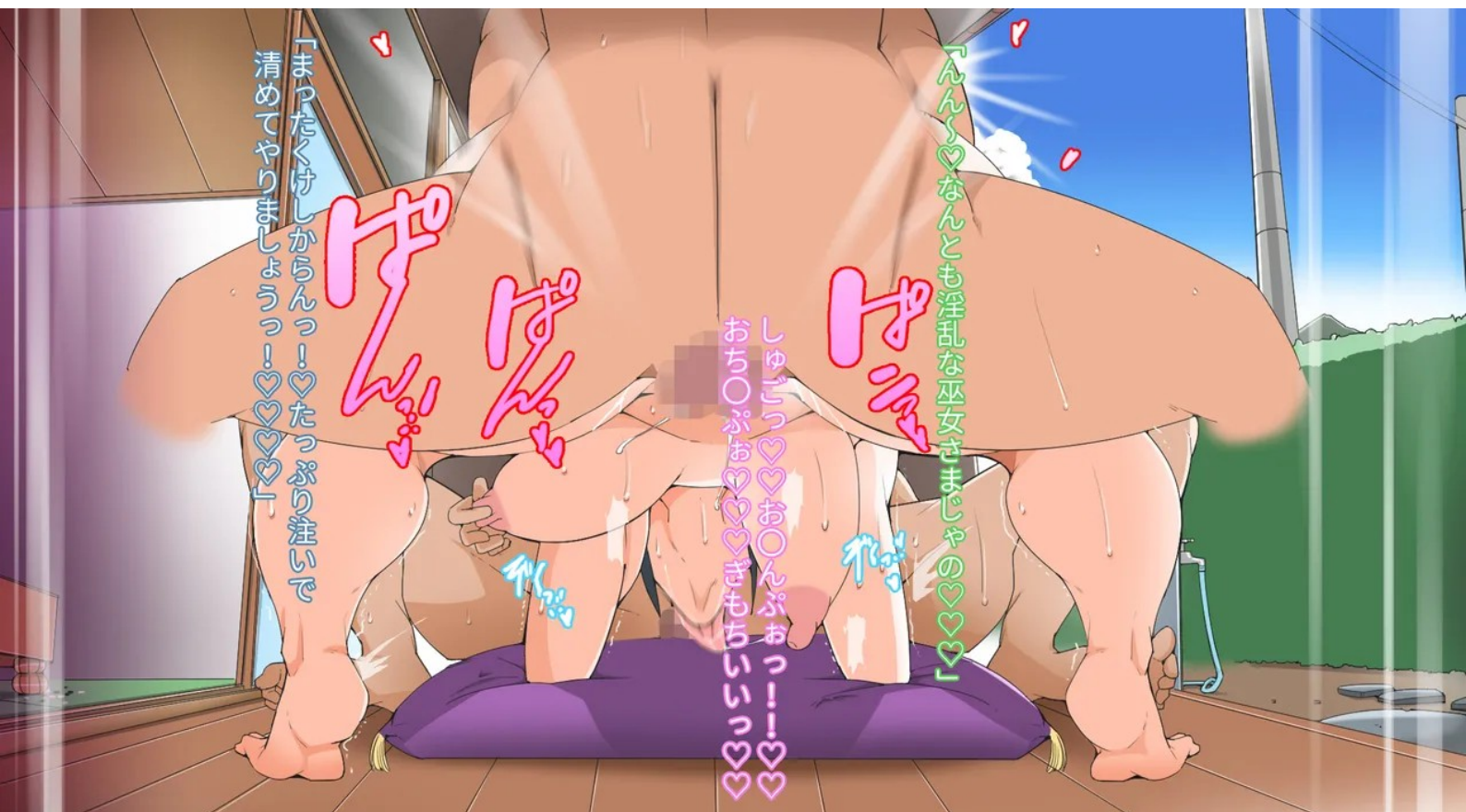
♡♡

♡♡

♡♡







「んんん♡なんとも淫乱な巫女さまじゃの♡♡♡」

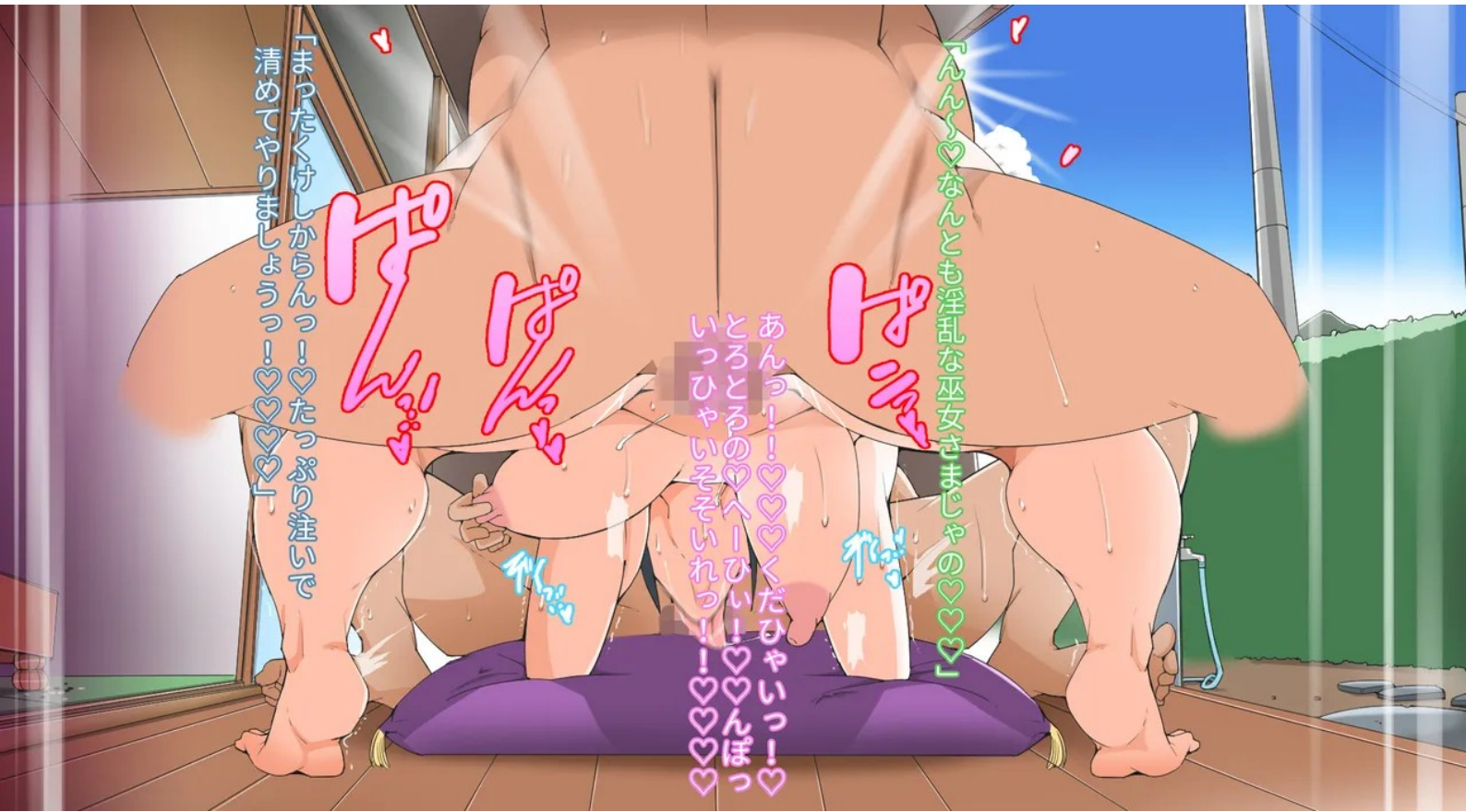
しゅわん♡♡お○んがおっ♡♡♡
おは○お♡♡♡おは○お♡♡♡

げん♡
げん♡

「まったくけしからんっ♡たっぷり注いで
清めてやりませうっ♡♡♡♡♡」

んん♡

んん♡



「まったくけしからんっ！ たっぷり注いで
清めてやりませうっ！♡♡♡♡♡」

げんげんげん

げんげん

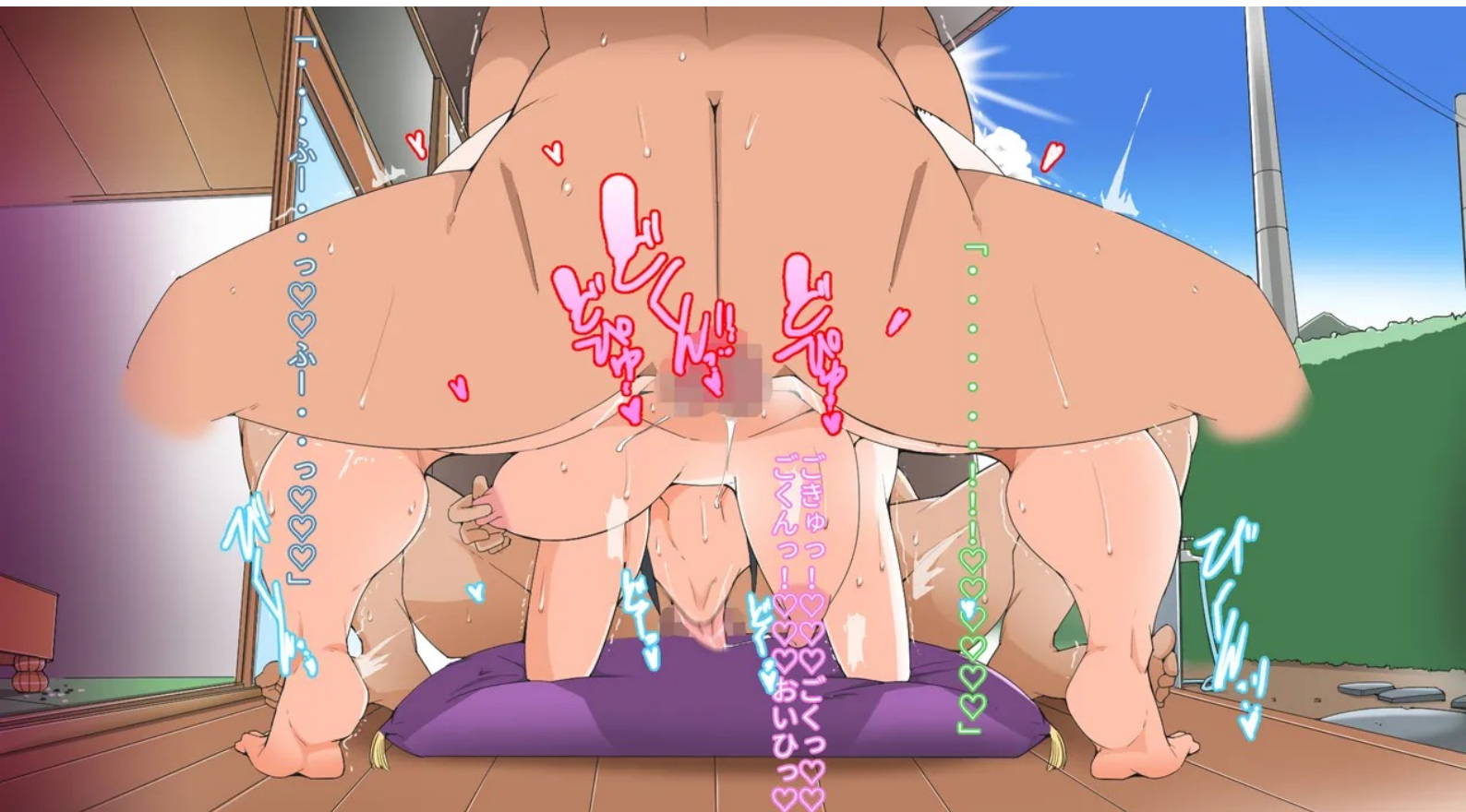
げんげん

あんっ！♡♡♡♡だひゃいっ！♡
とろとろの♡へーひい！♡♡んほっ
いっひゃいそいれっ！♡♡♡♡♡

「んん♡なんとも淫乱な巫女さまじゃの♡♡♡♡♡」

わんわん

わんわん





その後、母は無事に務めを終えて、俺達兄弟もまた実家を後にした。まさに夢のようなひと夏だった。だが記憶というのは風化する。現実が起こったどんなに鮮烈な記憶でも、時が経てば夢とかわりがなくなるほど曖昧になってうすれてゆくもの。もしもその理りに抗い得る「記憶」があるのだとすれば……それは、











お・し・ま・い

回復なっつて

びん

びん

びん

びん

♡♡♡♡

♡♡♡♡